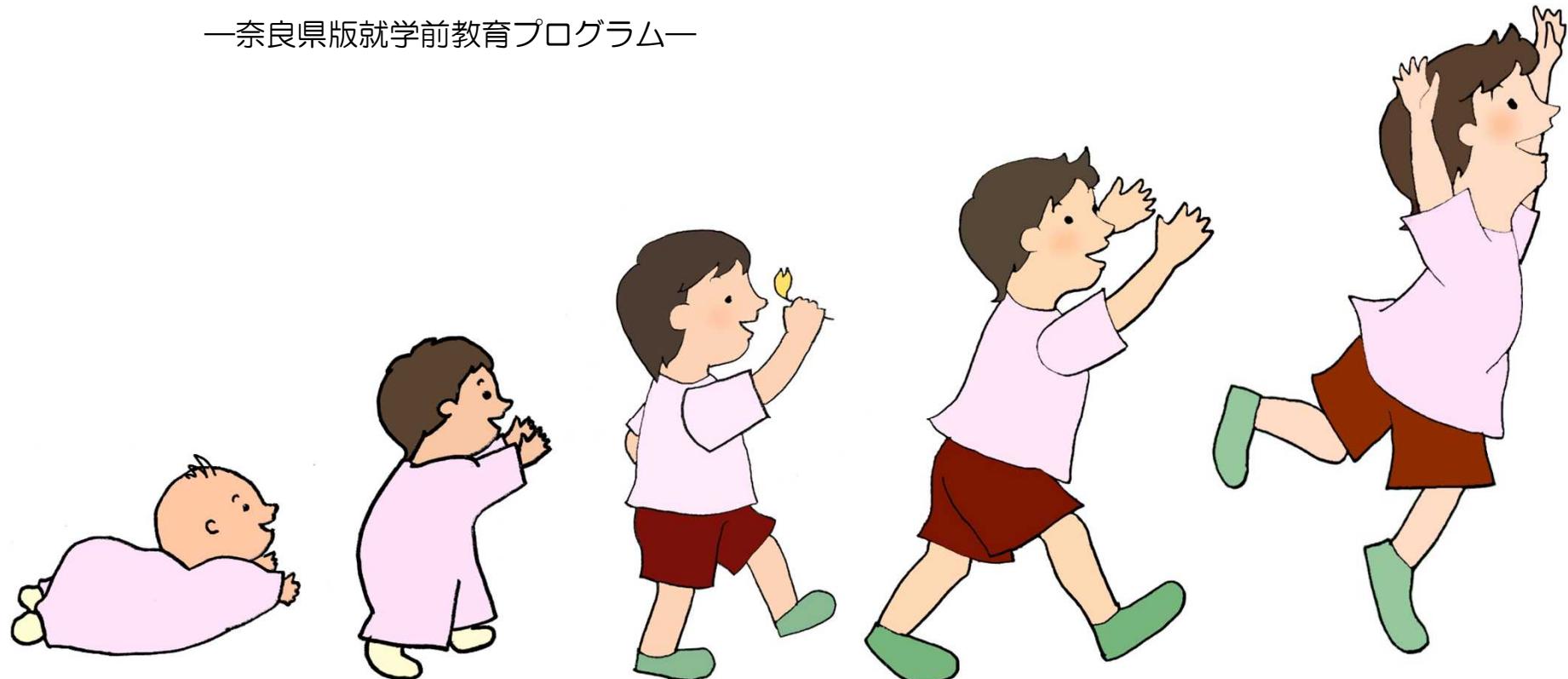


はははたくなら

—奈良県版就学前教育プログラム—



—奈良県・奈良県教育委員会—

奈良県・奈良県教育委員会では、このたび、平成29年度に作成された「奈良県版就学前教育プログラム」を基に、本県の教育課題を踏まえ、子どもの発達の姿とそれに応じた教育課題の解決に向けた関わり方を示した改訂版プログラム「はばたくなら」を作成しました。

奈良県の就学前の子どもたちを健やかに育てるために、どのように教育・保育を進めるのかを確認できるようにしています。また、家庭や小学校との連携の際の参考にもしていただけよう、子ども理解や遊びの中での子どもとの関わり方を中心にまとめています。

本県の就学前教育に関わる人々が本プログラムを奈良県の就学前教育の基本とし、日々の教育・保育の参考にできるようにまとめています。子ども理解を深めるためのワークシートや日々の記録、研修の際の教材等として活用し、自身の実践を書き込んだり、部分を取り上げたりして身近に置いて活用していただければ幸いです。

就学前教育に関わるすべての人々が、子どもたちが未来へ羽ばたく姿と共に描きながら、子どもたちの今を語り合うために「はばたくなら」を活用していただくことを願っています。

もくじ

子ども理解を深める

研修を深める

小学校に
つなぐ

I 奈良県版就学前教育プログラム作成の経緯	1
・奈良県の教育課題との関連について	2
・「奈良県版就学前教育プログラム」について	3
・「はばたくなら～奈良県版就学前教育プログラム～」における援助の重点	4
II 子どもの発達と教育内容	5
・子どもの発達	6
・子どもとの関わり	6
・教育の「3つの視点」と「5領域」	7
・子どもの発達に合わせた援助	8
III 子どもの発達と遊びの姿～環境の構成と幼児への関わりを深める～	10
・～自尊感情（豊かな感性と表現等）～	11
・～規範意識（道徳性・規範意識の芽生え等）～	19
・～学習意欲（思考力の芽生え等）～	27
IV 研修の展開例及び研修資料～実践から評価・改善へ～	37
・就学前教育に係る研修資料～実践事例から深める～	38
・研修資料及び展開例	40
V 明日の“楽しい保育”につながる保育記録の工夫	45
・奈良教育大学附属幼稚園の研究～「子どもたちの未来につながる“楽しい保育”的追及」から～	46
VI 小学校教育を見通した幼児期の学びの在り方と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」～幼小接続推進力～	55
・小学校教育を見通した幼児期の学びの在り方と接続期の実践事例	56
・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の発達過程	58

I 奈良県版就学前教育プログラム作成の経緯

本県における就学前教育の充実に対する認識の前提には、学齢期における指標となる「全国学力・学習状況調査」等において、意識に関わる「自尊感情」「規範意識」「学習意欲」等に関連する項目の本県児童生徒の平均値は依然として全国平均に比べ低く、課題が見られることがあります。

これらの意識等の醸成を本県の子どもの教育課題と捉え、その解決のためには就学前からの教育の充実が必要であると考えました。そこで、これらの意識などの醸成につながる、幼児期における効果的な取組を検討し、本県の教育課題に即した「奈良県版就学前教育プログラム」として整理しました。

このたび、平成29年3月に告示された「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」「保育所保育指針」を踏まえ、さらに「自尊感情」「規範意識」「学習意欲」といった意識の醸成を支える取組を、子どもの発達段階に即して具体的に示した奈良県版就学前教育プログラム「はばたくなら」を作成しました。

奈良県版就学前教育プログラム作成の経緯

奈良県の教育課題との関連について

幼稚園教育要領には、「一般に、幼児期は自分の生活を離れて知識や技能を一方的に教えられて身に付けていく時期ではなく、生活の中で自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験を通して、この時期にふさわしい生活を営むために必要なことが培われる時期であることが知られている。」と示されています。この時期に何を経験し、どのような内容に取り組むかは、発達段階やこれまでに経験してきたこと、地域性等を考慮し、目の前の子どもに合わせて計画されるべきものです。

就学前教育・保育を行う場は、幼稚園、認定こども園、保育所など多様化しています。その教育・保育の基となる要領・指針は、「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」「保育所保育指針」と施設によって異なっています。また、前述の施設に在籍せず、就学前の期間を家庭で過ごす子どももいます。

就学前教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものです。そこで、県内のすべての子どもたちが、在籍する施設等に関わらず、質の高い教育・保育が受けられるよう、共通する指針として、平成29年度に作成された「奈良県版就学前教育プログラム」を基に子どもの発達段階やそれに応じた関わり方等をまとめ、「はばたくなら」を作成しました。

右表は、平成30年度全国学力・学習状況調査の自尊感情、規範意識、学習意欲に関する項目の本県児

童生徒の平均値をまとめたものです。依然として、本県児童生徒の平均値は全国平均に比べ低く、課題が見られます。

課題	自尊感情		規範意識		学習意欲	
関連項目	自分にはよいところがある		学校の決まり（規則）を守っていますか		算数・数学の勉強は好きですか	
校種	小学校	中学校	小学校	中学校	小学校	中学校
奈良県	82.6%	75.4%	86.5%	93.8%	60.2%	49.9%
全国	84.0%	78.8%	89.5%	95.1%	64.0%	53.9%
差	-1.4	-3.4	-3.0	-1.3	-3.8	-4.0

(平成30年度全国学力・学習状況調査結果から)

こうした本県の課題の解決に向け、幼児期から継続して取り組むことができるよう、「自尊感情」「規範意識」「学習意欲」の向上の視点からプログラムを作成しています。特に、乳児期からの発達の見通しを示すとともに、子ども一人一人が自分のよさを認め、友達と関わりながら主体的に学習に取り組むことができる援助の方法等を示しています。

また、子どもの発達には、家庭との協力が不可欠であることから、家庭と連携する際の参考となるよう、遊びの中での子どもとの関わり方や家庭での関わりのポイントなどを例示しています。

「奈良県版就学前教育プログラム」について

「奈良県版就学前教育プログラム」は、平成27年度から奈良県と共同研究を行ってきた京都大学の研究チームが、アメリカのハイスクープ就学前教育カリキュラムの研究から取りまとめた概要より「自尊感情」「規範意識」「学習意欲」等の視点に該当する指導方法を参考として作成しています。「はばたくなら」においても、この指導方法を踏まえ、特に大切にしたい援助の在り方をまとめています。

ハイスクープ就学前教育カリキュラムの共通する指導方法

①保育者は、子どもの主体的な活動、自主性の発達を支援するための足場づくり（環境づくり）をする存在

②日々の遊びは、子どもが主体。子どもの興味・関心にしたがい、「計画→実行→評価→振り返り」のサイクルを取り入れ、子どもの主体的な学びの能力を養っていく。

③日常の活動の中に、保育者主導、子ども主導、多人数グループ活動、少人数グループ活動の時間を取り入れる。

④保育者による一方的な「教え込み」ではなく、保育者と子どもを対等な関係として位置付けた相互交流が求められる。

⑤学習スペースとして、「家庭エリア」・「芸術エリア」・「ブロック遊びエリア」・「小さなおもちゃエリア」・「コンピュータエリア」・「読み書きエリア」を区分して用意し、活動目標ごとに利用する。

⑥子どもの様子を的確に把握し、状況に応じた働きかけをするように努める。

⑦子どもに自らの行為の意味や価値を認識させるため、適切に話しかけ、子どもの行為についてコメントする。

⑧子どもの発達により、もう一段階先に進めそうなときには、適切なタイミングで新たな課題を提示する。（「教え込み」ではなく「さりげなく」）

「自尊感情」の指導方法

- ①子どもの能力と発達レベルに合わせて、自助スキルの向上を促進する
- ②子どもが次の段階に進めそうなときは乗り越えられる次のレベルを提示する
- ③子どもの主体的な選択と実行をサポートする
- ④子どもの努力と成し遂げたことを認識させる
- ⑤子どもにリーダーになる機会を与える

「規範意識」の指導方法

- ①保育者自らが、道徳的な行動モデルとなる
- ②道徳的な問題をシンプルな結果と原因に結び付けて状況を説明する
- ③子どもに道徳的行動について気付かせる
- ④家庭と幼稚園（こども園・保育所）との間に一貫性をもたせるために、保護者を巻き込む

「学習意欲」の指導方法

- ①できたことではなく努力に着目する
- ②子どもが新しいことに挑戦したときに肯定する
- ③子どもが不安なく活動するために、学習環境が安全であると知らせる
- ④保育者主導の活動時にも子どもの自主性を奨励する
- ⑤日常の時間において、計画を立てる時間をいつも設定する
- ⑥一日の活動全体を通して子どもが意図的に選択できる機会をつくる
- ⑦子どもの選択や決定に保育者が興味を示す

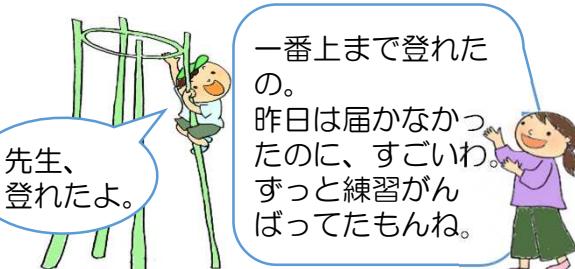
「はばたくなら～奈良県版就学前教育プログラム～」における援助の重点

ハイスクープ就学前教育カリキュラムの指導方法を踏まえ、本県の就学前教育において、特に大切にしたい援助の在り方を示します。幼児期の教育・保育は、「環境」を通して行います。「環境」とは、何を与えるか、といった物質的、空間的なものだけでなく時間や社会的背景も含まれます。中でも最も重要な環境は、教員や保育士等の「保育者」であり、その援助の在り方を考えることが教育・保育の質を高めることにつながります。

改訂版就学前教育プログラム「はばたくなら」においてもこの指導方法を踏まえ、特に大切にしたい援助の在り方をまとめています。

1 「自尊感情」を育む援助

- (1) 子ども自らが考え方を選択したことを認め、試したり行動したりする姿を支える
- (2) 子どもの発達段階を見極め、次の段階に進めそうなときは、少しがんばれば乗り越えられそうな課題を提示する
- (3) 子どもが自分の力でがんばったこと、その結果成し遂げたことを認識できるようにする



自尊感情は「自己の能力への自信」、つまり「やればできる」という自信です。

子どもが新しいことに挑戦するときや問題解決に向かおうとするときが最も重要なタイミングです。そのときに必要となるのが大人の働きかけです。

2 「規範意識」を育む援助

- (1) 保育者自らが、道徳的な行動モデルとなる
- (2) 道徳的な事象について、簡単な結果とその原因を結びつけて状況を説明する
- (3) 日常にある道徳的な行動を取り上げ、子ども自身が意識できるようにする



基本的な道徳性の発達においては、原因と結果を認識させることが極めて重要です。

例えば、「もし本のページを破り取ったら（＝原因）、クラスの誰も本を読めなくなる（＝結果）」という流れです。また、幼児期には、行動の裏にある“意図”に気付けるかどうかも重要です。

3 「学習意欲」を育む援助

- (1) 「できた」という結果ではなく、努力した過程に着目する
- (2) 活動の見通しをもたせ、やるべきことややりたいことを自分なりに考え、計画できるようにする
- (3) 子どもが選択や決定ができる機会を意図的につくり、その選択や決定に保育者が興味を示す



興味あることや自分の役に立つことは、自ら学ぶ意欲につながります。意欲的になるにつれて、子どもは自ら選択や決定を行い、思いを強め、目的をもって計画を立てるようになります。そのような活動を支える姿勢が大切です。

Ⅱ 子どもの発達と教育内容

本県の教育課題の解決に向けた就学前教育の取組を0～5歳という発達段階に応じて考えるため、平成29年3月に告示された「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」「保育所保育指針」を踏まえて、子どもの発達とそれに応じた保育の援助及び各年齢ごとの教育内容を示しました。

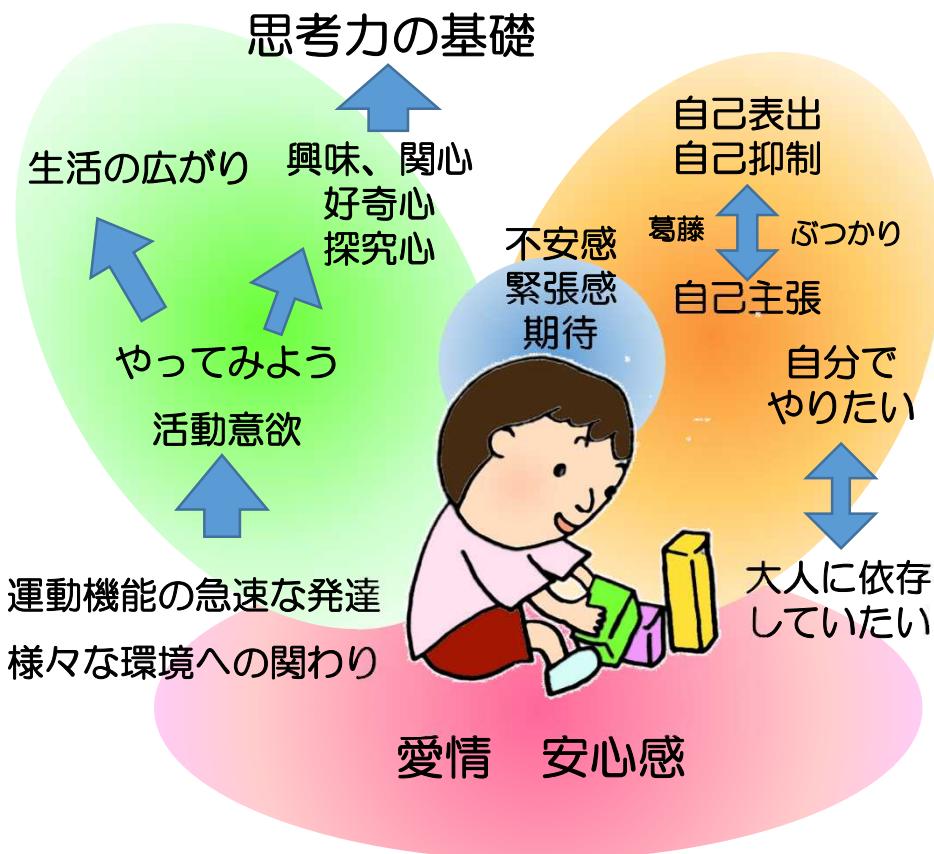
教育を行う際には、子どもの発達を理解し、個に応じた関わりによって発達を促すとともに、発達を見通すことも重要です。子どもが今見せる姿を受け止め、これから育ってほしい姿を描く、「幼児理解力」が必要です。また、就学前教育の中で大切にしたいことは、教育を構成する、環境、人やものとの関わり、教育内容、保育者の援助を総合的に考え、展開する「保育構想力」です。

これらの基になる子どもの発達や援助の方法について本章で示し、本県の教育課題解決に向けた具体的実践をⅢ章で紹介します。

子どもの発達と教育内容

子どもの発達

乳幼児期の子どもは、保護者や特定の大人との親しい人間関係を軸にして営まれる生活から、より広い世界に目を向け始めます。そして、生活の場、他者との関係、興味や関心などが広がり、依存から自立に向かって成長していきます。子どもの特性に合わせ、子どもにとってふさわしい生活を考えていきましょう。

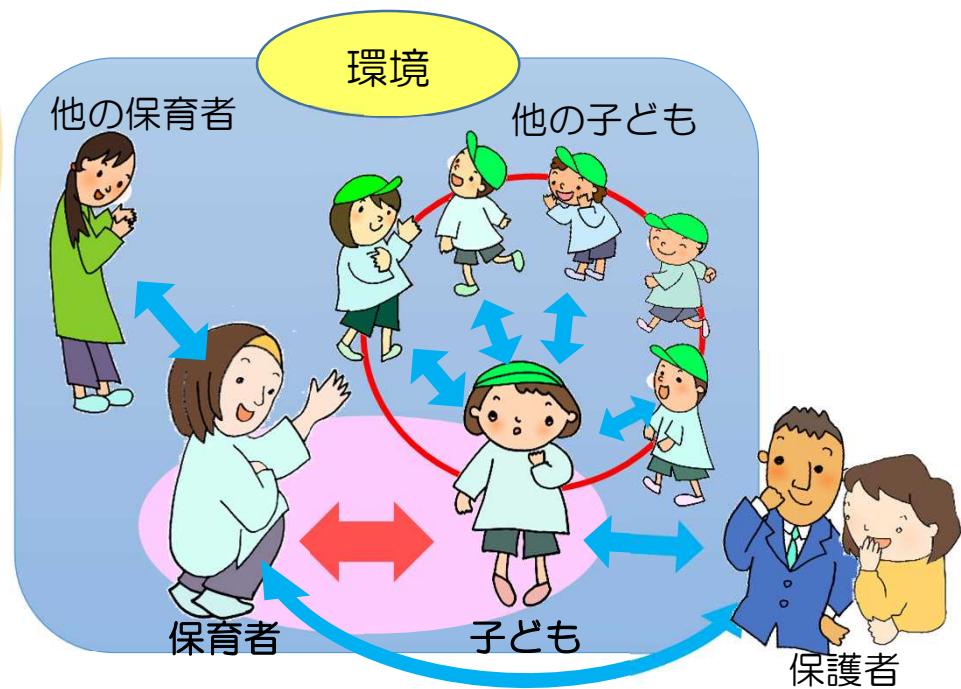


子どもとの関わり

下図は、一人の子どもを中心に、周りで関わる人の相関イメージです。（平成29年度就学前教育研究調査事業京都大学報告のイメージ図から）

子どもの発育・発達は、子ども同士の関わりを主としながら多くの人と関わることで促されます。

本プログラムでは、子どもの活動に対する見守り、援助としての保育者から子どもへの声かけを中心に、環境づくり、子ども同士の関わりや家庭、地域での関わりも含めて、活動の場面に応じて示しています。



教育の「3つの視点」と「5領域」

幼保連携型認定こども園教育・保育要領及び保育所保育指針では、乳児期、1、2歳、3歳以上の3つの発達の段階での教育・保育に関するねらいや内容が示されています。乳児期の子どもには3つの視点が、1歳～3歳及び3歳以上の子どもには5つの領域からねらいが示されており、以下はそれらをまとめたものです。3歳以上は幼稚園教育要領とも同じです。

3つの視点

健やかに伸び伸びと育つ

- ・身体感覚が育ち、快適な環境に心地よさを感じる
- ・伸び伸びと体を動かし、はう、歩くなどの運動をしようとする
- ・食事、睡眠等の生活のリズムの感覚が芽生える

身近な人と気持ちが通じ合う

- ・安心できる関係の下で、身近な人と共に過ごす喜びを感じる
- ・体の動きや表情、発声等により、保育教諭等と気持ちを通わせようとする
- ・身近な人と親しみ、関わりを深め、愛情や信頼感が芽生える

身近なものと関わり感性が育つ

- ・身の回りのものに親しみ、様々なものに興味や関心をもつ
- ・見る、触れる、探索するなど、身近な環境に自分から関わろうとする
- ・身体の諸感覚による認識が豊かになり、表情や手足、体の動き等で表現する

5領域

健 康

- ・明るく伸び伸びと生活し、自分から体を動かすことを楽しむ
- ・自分の体を十分に動かし、様々な動きをしようとする
- ・健康、安全な生活に必要な習慣に気付き、自分でしてみようとする気持ちが育つ

- ・明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう
- ・自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする
- ・健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付け、見通しをもって行動する

人 間 関 係

- ・園・所での生活を楽しみ、身近な人と関わる心地よさを感じる
- ・周囲の友達等への興味・関心が高まり、関わりをもうとする
- ・園・所の生活の仕方に慣れ、きまりの大切さに気付く

- ・園・所の生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう
- ・身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ
- ・社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける

環 境

- ・身近な環境に親しみ、触れ合う中で、様々なものに興味や関心をもつ
- ・様々なものに関わる中で、発見を楽しんだり、考えたりしようとする
- ・見る、聞く、触るなどの経験を通して、感覚の働きを豊かにする

- ・身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ
- ・身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする
- ・身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする

言 葉

- ・言葉遊びや言葉で表現する楽しさを感じる
- ・人の言葉や話などを聞き、自分でも思ったことを伝えようとする
- ・絵本や物語等に親しむとともに、言葉のやり取りを通して身近な人と気持ちを通わせる

- ・自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう
- ・人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう
- ・日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、保育者や友達と心を通わせる

表 現

- ・身体の諸感覚の経験を豊かにし、様々な感覚を味わう
- ・感じたことや考えたことなどを自分なりに表現しようとする
- ・生活や遊びの様々な体験を通して、イメージや感性が豊かになる

- ・いろいろものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ
- ・感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ
- ・生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ

0歳

1歳

2歳

3歳

4歳

5歳

子どもの発達に合わせた援助

子どもの発達する姿を通して、子どもに育みたい資質・能力が身に付くためにはどのような援助が大切なかを示しています。また、家庭と共に発達を支えられるよう、家庭での関わりのポイントを合わせて示しています。

発達の姿

- ・首がすわり、手足の動き、座る、はうなどの運動能力や聴覚視覚が発達し、探索行動が活発になる。
- ・喃語で自分の欲求を表現する。
- ・離乳食が始まる。

- ・一人歩きができるようになり、行動範囲が広がる。
- ・指先の機能が発達する。
- ・友達と同じことをしたり、物を奪い合ったりして他の子どもとの関わりが増える。
- ・一語文を話す。
- ・自我が育ち、思い通りにならないと癇癪を起こすなどの様子が見られる。
- ・想像して見立てて遊ぶようになる。

- ・基本的な生活習慣がある程度身に付く。
- ・走る・跳ぶなどの基本的な動作が一通りできるようになる。
- ・語彙が急激に増加し、「なぜ」「どうして」と盛んに質問する。
- ・一人遊びを楽しむ。
- ・大人の行動や日常の経験を取り入れ再現して遊ぶ。

0歳

1歳

2歳

3歳

この時期
に必要な
援助

- ・乳児が心地よい生活が送れるように、愛情豊かに行動や、欲求に応える。
- ・安全が保障され、安心して過ごせる環境をつくる。



- ・子どもの生活のリズムを整えながら、自分でしようとする気持ちを受け止める。
- ・温かいまなざしで見守り、支える。
- ・子どもの表情や言葉に対して、愛情を込めて応える。



- ・基本的な生活習慣など、自分でできた喜びを味わえるようにする。
- ・子どもの様子を注意深く観察し、話をしっかりと聞く。
- ・子どもがうまく言い表せない時は、思いや感じたことを言語化する。
- ・友達と一緒にすることの楽しさや子どもの思いに寄り添い共感する。

家庭での
関わりの
ポイント

大人の笑顔と語りかけに安心感を抱きます。子どもの表情や仕草を、笑顔や言葉で優しく受け止めましょう。

大人の行動をモデルとしながら、自分でしようとする気持ちを育てましょう。

行動範囲を家庭から広げ、地域の環境との関わりの中で、様々な経験ができるようにしましょう。

自分でしようとする気持ちを大切にしながら、食事や排泄の仕方を身に付けられるようにしましょう。

小学校へ

- ・基本的な運動能力が育つ。
- ・身近な自然環境に興味を示し、積極的に関わる。
- ・自分の行動やその結果を予測して不安になるなどの葛藤も経験する。
- ・自己を十分に発揮することや、他者と協調して生活することを学び始める。
- ・決まりの大切さに気付き、守ろうとするようになる。
- ・気の合う友達とイメージを共有しながら想像して遊ぶ。

4歳

- ・子どもが助けを求めてきたときは、いつでも援助できるように見守る。
- ・子どもの努力を認め、自信がもてるような言葉かけをする。
- ・イメージが実現できるような、幅広い材料・素材を準備しておき、必要に応じて提供する。

- ・生活に必要な行動を一人で行う。
- ・一日の生活の流れを見通すことができる。
- ・自ら活発に体を動かして遊ぶ。
- ・言葉による伝達や対話する能力が身に付く。
- ・友達の考えを取り入れながら、自分なりに考えたり納得のいく理由で物事を判断したりする。
- ・集団での活動が高まる。（決まりを守る、役割を果たす）
- ・社会生活に必要な力を身に付ける。
- ・友達と遊びの中で、共通のイメージをもち、試行錯誤しながら遊びを進める。

5歳

- ・子どもの遊びの過程を認め、自信がもてるようにする。
- ・自分たちで進めたり解決したりしている様子を見守り、充実感や満足感がもてるような言葉かけや援助をする。



- ・全身運動がなめらかになり、様々な運動に意欲的に挑戦する。
- ・自立心が高まる。
- ・自分から様々なことに興味や関心を示し、意欲的に環境に関わる。
- ・自分の主張を通すだけでなく、仲間と協調しようとする。
- ・思考力や認識力が高まり、自然現象、社会現象、文字、数等への興味や関心が深まる。
- ・知識や経験を生かし、創意工夫を重ね、協同的な遊びを進める。

幼児期の終わり

- ・子どもの努力を認め、自信や自覚がもてるような言葉かけをする。
- ・集団としての充実感や満足感が味わえるような言葉かけをする。



様々な体験を通して社会性が高まります。子どもの話に耳を傾け、じっくりと聞きましょう。

子どもが夢中になっていることを認め、家族も関心を示し、共有しましょう。

小学校での具体的な生活や様子を知り、親子で就学への期待を膨らませましょう。就学後の安心感と学ぶ意欲につながります。

III 子どもの発達と遊びの姿 ～環境の構成と幼児への関わりを深める～

本章では、本県の教育課題である「自尊感情」「規範意識」「学習意欲」の醸成に向けた教育・保育実践を、発達の段階に沿ってまとめています。

「自尊感情」「規範意識」「学習意欲」などは、「非認知能力」「社会情緒的スキル」と呼ばれる力です。測ることのできる「認知能力」とは異なり見えにくい力ですが、大切な「心の力」です。

こうした力を育てるため、就学前教育の基本である「遊び」の中で適切な援助を行う際の参考にしていただきたいと考えています。

～自尊感情（豊かな感性と表現等）～

「自尊感情」とは、「自分が好き」「自分を大切に思える気持ち」です。自尊感情が醸成されていることで、自分をきちんと評価し受け入れることができたり、自分の意見を言い、自己決定ができたりする姿につながります。

「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」「保育所保育指針」に示される「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のうち、特に「自立心」や「豊かな感性と表現」などと関連するものであり、それらの内容を踏まえた教育・保育実践をまとめています。



子どもの発達と遊びの姿～自尊感情（豊かな感性と表現等）～

事例A-1

保育者の援助の下、素材の動きの変化や面白さを感じ取り、「もう一回もう一回」と繰り返し遊ぼうとする気持ちを受け止めていきます。

事例A-2

保育所等で、子どもたちは多くの「はじめて」を経験します。その中の子どものつぶやきや行動の様子から、感じたことややってみたいと思う気持ちを捉え、今後生まれる学びも想定しながら、丁寧に関わることが大切です。



0歳

1歳

2歳

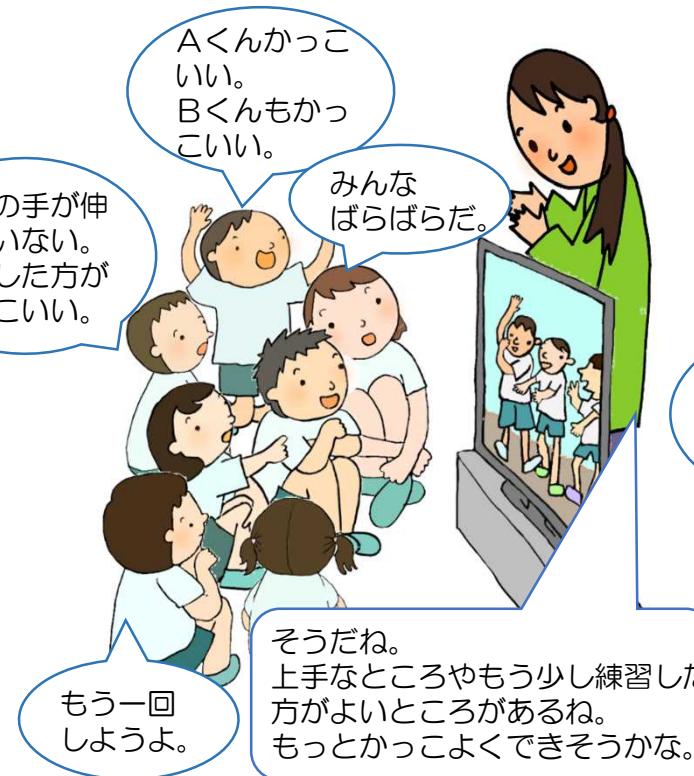
事例A-3

発達に応じた素材や場の提供によって、遊びの中で子どもは力を発揮します。自分自身の生活や経験を生かしながら遊ぶことが、自己発揮につながります。



事例A-4

自分たちの姿をビデオ視聴し、よいところや課題を見付けることは、みんなでよりよくしようとする意欲的な態度を育てます。



事例A-5

遊びの見通しをもち、具体的にイメージすることで、目的をもった遊びを展開していきます。課題に向けてどのように取り組むか、自ら考える経験が学習の場でも発揮されます。



3歳

4歳

5歳

事例A－1

自尊感情（豊かな感性と表現等）

○歳児 「紙ちぎり 楽しいな」

広告のちぎり紙遊びをした。保育者がビリビリビリっと破るのを見て嬉しそうに笑顔を見せていました。

保育者の「やってみようか。」の誘いかけにどうしていいか分からぬ子どもが多かった。

たくさんちぎった紙を保育者が「ふわふわー」と言って舞わせると手足を動かして喜んでいた。

紙に興味を示すようになり、自分でも引っ張ったり握ったりして触れていた。

保育者に「ふわふわー」と紙を降らせてもらうことを喜び、もっとしてほしいという表情を見せていました。



○子どもの姿

- ・保育者の様子を見て、楽しく面白いものであると感じたようでもっとしてほしそうにしている。
- ・紙に次第に興味を示すようになり、引っ張ったり握ったりして触れている。

○保育者の関わりの意図

- ・広告紙の感触や舞う動きを見て喜び、楽しいという思いを共有していきたい。
- ・子どもの表情を読み取り、子どもが楽しい気持ちを全身で表し、心を解放して遊べるようにしたい。

○この時期に大切にしておきたいこと

- ・様々な素材を用いて遊び、動きや感触の面白さを感じながら、その子なりの遊び方で十分に楽しめるような時間を確保することが大切である。
- ・楽しさなどの感情を全身で表現できるように、表情豊かに言葉をかけるとともに、子どもの思いに共感することが、自己を発揮する姿につながる。

事例A-2

自尊感情（豊かな感性と表現等）

1歳児 「カブトムシにさわったよ」

保護者がカブトムシを持ってきてくれたので、飼育ケースに入れ、子どもたちがいつでも見ることができるように場所に置いた。

カブトムシを見た子どもたちは、「ムシ」と指を差し、飼育ケースをのぞき込んだ。保育者に抱っこしてもらい恐る恐る見たり、戸惑いを見せながらも、保育者が手に持つカブトムシの背中にそっと触れたりする子どももいた。

カブトムシに興味をもった子どもは、登所してくると、保育者と一緒にカブトムシの所へ行き、「ムシさん。」「ご飯食べてるね。」「登ってるね。」など保育者とやりとりをしながら、カブトムシの様子を見、カブトムシの背中に触れるなどして喜んだ。また、カブトムシの手足の動きを真似る姿も見られた。「カブトムシみたいやなあ。」と保育者も一緒にカブトムシになって遊んだ。



○子どもの姿

- ・保育者と一緒にカブトムシを見たり、保育者が世話をする様子を見たりする中で、カブトムシに興味をもった子どもたちが数人いた。

○保育者の関わりの意図

- ・子どもが見たい時にいつでも見ることができるよう飼育ケースを低い場所に置いた。
- ・保育者がカブトムシの世話をしたり、親しんだりする様子を子どもたちに見せることにより、子どもたちが興味をもち、昆虫などを身近に感じるようになってほしい。
- ・見たことや感じたことを、自分なりに言葉や表情、態度で表現してほしい。

○この時期に大切にしておきたいこと

- ・安全面に配慮しながら、初めての虫との出会いの場を大切にしていく。
- ・保育者が子どものつぶやきや表情、態度などから子どもの要求や思いを丁寧に受け止め、共感したり、表現したりすることが、安心して自己を発揮することにつながり、初めての環境にも関わろうとする姿につながる。

事例A-3

自尊感情（豊かな感性と表現等）

3歳児 「小麦粉粘土で遊ぼう」

小麦粉粘土を、子どもの目の付く所に置いておく。小麦粉粘土を見つけた子どもが、「これ何。」と興味を示し、「ふわふわやなあ。」「匂いする。」と保育者に話したり、笑顔で感じたことを話したりしている。

「団子に丸めてみようか。それとも伸ばしてみようか。」と誘いかけると、「パン屋」「クッキー屋」と発想豊かに楽しんで作っている。

小麦粉粘土で楽しむ姿が見られたので、土曜参観で、「小麦粉粘土で遊ぼう」と題して、親子で小麦粉粘土に魔法の粉（食紅）を加え、小麦粉粘土をつくった。色の変化に興味をもって、ハンバーグやミートボール、お子様ランチに見立てて、親子で楽しむ姿が見られた。

後日、自発的な遊びの場で自由に小麦粉粘土が使えるように、環境を整えた。

『からすのパンやさん』の絵本を読んだことにより、お店遊びが始まった。様々な材料や用具を準備したことで、小麦粉粘土で「アンパンマン作ろう。」「たけのこパンやで。」と興味をもって遊ぶ姿が見られた。

○子どもの姿

- ・入園当初から、粘土、ブロック、ままごとコーナーで好きな遊びを見付けて遊んでいる。
- ・5月半ば、草花でペンダントや花束をつくったり、サーキット遊びをしたりして、保育者と一緒に好きな遊びを楽しんだことで、友達と話す姿が見られるようになる。

○保育者の関わりの意図

- ・小麦粉粘土で遊んだ経験を生かし、ごっこ遊びにつながってほしい。
- ・素材の性質や色の変化を感じてイメージを膨らませ、表現する楽しさを味わってほしい。



○この時期に大切にしておきたいこと

- ・同じ遊びの場にいる友達に目を向けられるようになり、一緒にいることや同じことをして遊ぶことを楽しむ（平行遊び）時期である。
- ・乳幼児期には、楽しみながら手先を使う遊びが展開できるよう、素材や遊びの展開を工夫することが大切である。
- ・自分のしたい遊びを十分に楽しむことができるよう、表現しやすい素材を用いることも大切である。

事例A－4

自尊感情（豊かな感性と表現等）

4歳児 「みんなでかっこよくダンスをしよう」

前日に撮ったダンスの練習の動画をみんなで見た。友達の動きを見て、「腕が伸びていて、Aくんかっこいい。」「Bくんもかっこいい。」と認め合っていた。

「みんなの動きがばらばらだった。」と気付く声が上がった。「どうしてだろう。」と問いかけると、「曲をちゃんと聞いていないからだ。」という意見が出た。保育者も「なるほど。ちゃんと曲を聞けばみんな揃うかもしれないね。」と共感した。

自分の姿を見て気付いたことはあるか問いかけると、「手を伸ばすところで、足も一緒にジャンプしてしまった。」「パンチする時、自分の手が伸びていなかつた。」と気付いたことを出し合った。「あっ、僕も。」「私も。」と新たな課題を見付けた。

「しっかり伸ばした方が絶対かっこいい。」と子どもから声が出た。「本当だね。その気付きは大事なことだね。先生もそう思う。」と共感した。

「上手に踊れているところやもう少し練習した方がよいところをたくさん見付けることができたね。」と子どもに共感したことから、「もう1回踊る。」「次は手を伸ばすぞ。」と意欲的に取り組む姿が見られた。

○子どもの姿

- ・日頃からダンスや体操などを好む子どもが多く、体を動かすことを楽しんでいる。
- ・2学期になり運動会の練習が始まり、意欲的に取り組む姿がある。

○保育者の関わりの意図

- ・自分のよいところや、もう少し工夫したらよいところに気付けるように、子どもがダンスを踊っている姿を動画で撮り、視聴する機会をもつようにした。
- ・動画を見てみんなで楽しく振り返り、子どもの気付きを取り上げることで、頑張ろうとする気持ちにつなげたい。
- ・自分たちのダンスを更によりよいものにしていくために、自ら課題をもって取り組んでいこうとする意欲を育てたい。

○この時期に大切にしておきたいこと

- ・体を動かしてダンスをすることで、友達と一緒に表現する楽しさを味わう。
- ・友達のダンスする姿が刺激となり、自分も繰り返し試してみようとする気持ちにつながる。
- ・動画視聴から自ら課題を見付けることが意欲となる。また、できた喜びを重ねる経験が大切である。

事例Aー5

自尊感情（豊かな感性と表現等）

5歳児 「パンケーキのクリームをつくりたい」

毎日の泡遊びから、とろとろのクリーム状の泡ができた。先日から友達と一緒にパンケーキづくりをして遊んでいたA児が、パンケーキにのせるホイップクリームにしたいと言い出した。

「先生、つくった泡ね、ほら、クリームみたいになったよ。これ、パンケーキにのせたらいいと思う。」

「ほんと。パンケーキ屋さんのクリームに使えそう。」

「やってみる。」と、A児は、絞り袋に泡を入れてみた。

「わあ、ぶちゅぶちゅ。あかんわ。もっと固い泡をつくれないと。」

数日の雨の後やっと晴れ、泡遊びができる日になった。

「先生、今日はパンケーキにのせられる固さのクリームをつくるわ。固いのをつくらないと、またぶちゅぶちゅになるなあ。」

「どんな固さの泡なら、クリームになるの。」

「ボウルをひっくり返しても落ちないぐらいの固さやねん。」

しばらくすると、「先生できた。ほら。」絞り袋に入れて絞ると、泡がクリームのようになった。

「できた。できた。」

「ほんと、パンケーキの上にのせられたね。おいしそう。」と共感した。

○子どもの姿

- ・A児は、先日から、台紙やスポンジに自然物などを飾ってパンケーキに見立てて遊んでいた。他児が泡遊びでつくっていたクリーム状の泡を見て、パンケーキに使いたいと言い出した。生活経験の中から出てくる発想を生かし、様々なものに見立てて遊びを展開している。

○保育者の関わりの意図

- ・A児の思いに寄り添うことで、遊びへの意欲につなげていきたい。
- ・子どもがもっている自分のイメージを具体化できるように言葉をかけることで、試行錯誤しながら実現できるようにしたい。

○この時期に大切にしておきたいこと

- ・子どもの気付きを新たな課題につなげ、考えたり工夫したりして、遊びに取り組む。
- ・失敗してもあきらめず、やってみようとする態度を認めることが大切である。また、どのようにしたいのか、具体的なイメージをもつことで挑戦する意欲が増し、継続して取り組む姿につながる。
- ・目的に向かって試行錯誤してきた過程を受け止め、幼児が達成感を味わえるように認める。

～規範意識（道徳性・規範意識の芽生え等）～

「規範意識」とは、決まりを守ればよいというものではありません。子ども自身が、集団生活や遊びの中で様々な決まりがあることに気付き、決まりの必要性やその意味を子どもなりに理解した上で、守ろうとする気持ちをもつことが大切です。

「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」「保育所保育指針」に示される「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のうち、特に「道徳性・規範意識の芽生え」と関連するものであり、その内容を踏まえた教育・保育実践をまとめています。



子どもの発達と遊びの姿～規範意識（道徳性・規範意識の芽生え等）～

事例B-1

大人との安定した関係を基盤に、「楽しかった」「気持ちよかったです」という経験を重ねていくことで、待つということを自然に理解するようになります。

事例B-2

身近な人の愛情を基盤に、遊びを通して、友達のもの、自分のものが分かり、人との関わりや必要な言葉を覚えていきます。

事例B-3

遊びの約束を言葉で知らせるよりも、具体的に示すことで「交代」「待つ」などの意味が分かり、友達と遊ぶ楽しさにつながっていきます。

Aちゃんもする。
Bちゃんの次にする
から待っててね。



どうぞ。



はい、行っ
てきます。



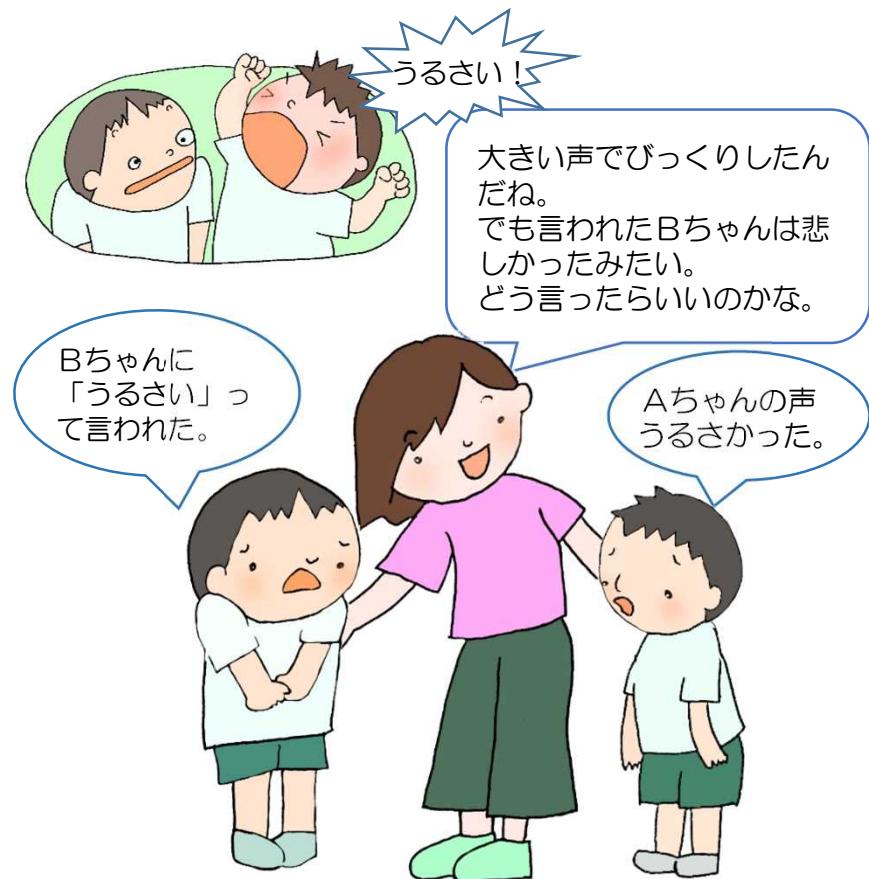
0歳

1歳

2歳

事例B-4

友達との関わりの中で、自分の思いを伝えたり、相手の思いを知ったりします。経験の中で、何がいけなかつたのか、どのようにすればよいかを、順序立てて一緒に考えることで、自分で判断できるようになります。



事例B-5

結果だけを言うのではなく、何が原因だったかを友達と一緒に考えることで、チームが力を合わせて、最後までがんばろうという気持ちが育っていきます。



3歳

4歳

5歳

事例B－1

規範意識（道徳性・規範意識の芽生え等）

○歳児 「『えんやらももの木』やりたいな」

保育室で「えんやらももの木」のふれあい遊びをしていた。保育者の歌が聞こえると、別の場所で遊んでいた子どもたちも集まってきた。

A児は、友達が大きいバスタオルの上でハンモックのようにして「えんやらももの木」の歌に合わせて揺らしてもらっているのを見ていた。

「やりたいなあ。」という様子で、じわじわと前の方に出てきたので、「Aちゃんもしたいの。」「次しようね。待っててね。」と声をかけた。A児はうなずいてその場で待っていた。

A児の順番になり、「Aちゃんの番がきたよ。上手に待てたね。」と声をかけると、自分からバスタオルの上に寝て「えんやらももの木」の遊びを喜んでいた。



○子どもの姿

- 子どもたちは、ふれあい遊びが好きで、保育者が歌を歌い始めるとそばに寄ってきて、自分もしてほしいと要求する。
- 自分もしてほしい気持ちがあっても、自分から表しにくい子どももいる。

○保育者の関わりの意図

- 「自分もしてほしい」「やりたい」という思いを表情や態度で表し、「できて嬉しい」「楽しかった」という経験を積み重ねられるようにしたい。
- したい気持ちを十分に受け止め、期待して待つことができるよう声をかけた。

○この時期に大切にしておきたいこと

- 子どもが「自分もしたい」という気持ちを表情や態度で表したタイミングを捉え、保育者が笑顔や言葉でその思いを受け止め、共感することが安心感につながる。
- 「したいことができた」「楽しかった」という経験を積み重ねる中で、0歳児なりに「またしたい」「次かな」と期待しながら待つ姿を大切にする。待っていると順番がくるということを経験を通して理解していくことが大切である。

事例B－2

規範意識（道徳性・規範意識の芽生え等）

○歳児 「おもちゃをどうぞ」

A児を抱いてあやしているところへ、ボールを持ったB児が、保育者と一緒に遊ぼうと寄ってきた。

保育者とB児がボールをついたり、転がしたりして遊んでいるのを、A児がじっと見ていた。

B児と遊びながら、「ボール、ぼーいやなあ。」とA児にも声をかけた。それまで泣いていたA児だったが、声かけに足をつんづん動かして喜ぶ姿も見られた。

B児に「Aちゃんのボールも持ってきてあげて。」と声をかけた。

B児がボールを持ってきたので、「Aちゃんに『どうぞ』って渡してあげて。」と言うと、B児はボールをA児に渡した。A児はボールを受け取り、保育者の膝から降りてボールで遊び始めた。



○子どもの姿

- ・A児は、保育者に抱っこしてもらいたい、そばにいてほしいという、甘えの要求が強いところがある。少しの間、保育者に抱かれて甘えたい気持ちが満たされると遊びに向かうことができる。

- ・B児は、友達に玩具を渡したり、名前を呼ぼうとしたりするなど友達に積極的に関わろうとする姿が見られるようになってきた。

○保育者の関わりの意図

- ・A児が保育者と友達の遊ぶ様子をじっと見ていたので、同じ玩具を渡してもらうことで、遊び始めるきっかけになればと考えた。
- ・B児には、更に友達との関わりを増やす機会にと声をかけた。

○この時期に大切にしておきたいこと

- ・一人一人の子どもの甘えや要求に応えたり、気持ちを受け止めたりしながら、安定した生活を送れるようにする。
- ・保育者に見守られながら、好きなもので遊んだり、保育者や友達と一緒に遊んだりすることが楽しいと感じられるような環境づくりや声かけをするなど、保育者の援助が大切になってくる。

事例B－3

規範意識（道徳性・規範意識の芽生え等）

2歳児 「バンバンカー遊び」

園庭で、車や三輪車に乗ることを楽しんでいる。白線で道を描くとその上を走り、遊ぶ姿が見られた。車に乗りたくて、順番を待っている子どもが「替わって。」と言うが、A児の耳には届かない。

保育者も一緒に声をかけ、聞こえてはいるものの、なかなか交代することができない。

そこで、道の上に一本のラインを引き、「ここまで来れたら交代ね。」と伝えた。すると、A児はそこまで車を走らせ、交代することができた。

ラインの横に円を描き、交代してほしいときは円の中で順番を待つことを知らせた。

「もうすぐ順番がくる」「次は自分の番」という見通しをもつことで、順番を待つことができ、繰り返し楽しむ姿が見られた。



○子どもの姿

- ・A児は、他の遊びの中でも、なかなか交代できないという姿があった。
- ・この時期、順番が分かり待つことができる子どももいるが、「順番」「かわりばんこ」の理解については、発達や生活経験の差により個人差が大きい。

○保育者の関わりの意図

- ・A児は、声かけだけでは聞き入れにくかったので、ラインを引くことで、交代場所を視覚的に理解できるようにした。待つ場所も円を描いて知らせ、「次は、～ちゃんの番。」「その次はAちゃんの番だよ、もうすぐだね。」と言いながら一緒に待ち、順番を待てばまた乗れることを伝えた。

○この時期に大切にしておきたいこと

- ・友達の存在に気付き、友達と一緒に遊ぶことを楽しむ時期であることから、必要に応じて順番や約束ごとなどを守る経験を積み重ねることが大切である。
- ・一方的にルールとして押しつけるのではなく、楽しむことと合わせて主体的に身に付けることが、その後の思いやりなどにもつながる。

事例B－4

規範意識（道徳性・規範意識の芽生え等）

3歳児 「友達とのやりとりの中で」

保育室でブロック遊びをしながら、A児がB児に話しかけた。A児は、「うるさい。」とB児に言われてしまう。

A児が保育者に「Bちゃんに『うるさい』って言われた。」と訴えた。

保育者は、「少しAちゃんの声が大きかったのかな。でも、突然『うるさい』って言われて嫌な気持ちになったんだね。」と、A児の気持ちを受け止めた。

B児には、「Bちゃん、Aちゃんの声うるさかったかな。」と尋ねると、「うん、うるさかった。」と答えが返ってきた。

保育者はB児の気持ちを受け止めながら、「なんだ。大きな声でびっくりしたんだね。でもね、Aちゃんは『うるさい』って言われて悲しかったみたい。」とA児の思いを伝えた。

二人に「どう言ったらいいかな。」と尋ねると、B児は「Aちゃん、声大きかったよ。」と自然に言葉が出てきた。A児は「声大きくしてごめんね。」とすぐに返した。

数日後、同じようなことがあったが、B児は「声、大きいよ。」と言うことができた。

○子どもの姿

- ・日頃、二人は仲が良く、いつも一緒に遊んだり、行動したりしている。
- ・この時期は、仲良しの友達ができ始める。友達との関わりが多くなり、言葉も発達してくるが、けんかなども見られる時期となる。



○保育者の関わりの意図

- ・二人は日頃の関わりが多く、このような場面がこれからもあると考えられるので、相手の気持ちに気付くことや、相手に伝わる話し方などを身に付ける機会にしていきたいと考えた。

○この時期に大切にしておきたいこと

- ・友達との関わりの中で、自分の思いを伝えたり、相手の思いに気付いたりできるような保育者の関わりが大切である。
- ・保育者がしっかりと子どもの気持ちを受け止め共感し、何がいけなかったのか、どうすればよいのかを順序立てて一緒に考えていくことで、自分で判断できるようになっていく。



事例B－5

規範意識（道徳性・規範意識の芽生え等）

5歳児 「もう一回しよう」

継続して学級で取り組んでいるリレー遊び。この日は欠席者があり、一人足りない。

「僕が2回走る。」「私も走りたい。」「この前のリレーで負けたから今日は絶対勝ちたい。」と子どもたち。

「どうやったら勝てるかなあ。」と投げかけた。

「バトンを落とさないようにしよう。」

「Aくん走るの速いから、Aくんが2回走ったらいい。」という意見が出た。

「Aくん走ってくれる。」と友達が言うと、A児は、「走る。」と嬉しそうな表情で答えた。

A児は2回走ったが、チームは負けてしまった。

「また負けたわ、ぼくが遅かったから。」とA児はしょんぼりとした表情をしていた。他の子どもたちの思いはどうだろうかと、様子をうかがった。

そこで、「ちょっとの差だったよ。おしかったね。」と伝えると、「僕こけたから。」「僕もバトン落としてしまった。」と、自分の姿を振り返っていた。

B児が「もう一回しよう。」と提案すると、周りから「悔しいからもう一回しよう。」「今度はもっと速く走るわ。」「A君もう一回走って。」と声が上がり、A児は「次がんばるよ。」とリレー遊びが再開した。

○子どもの姿

- ・A児は走るのが速く、走ることに自信をもっており、積極的にリレー遊びに参加している。
- ・走る順番を決めるとき、A児のチームが一人足らず、誰かが2回走らなければならなかつたが、走りたい子どもが何人かいて、誰が走るかがなかなか決まらない様子だった。

○保育者の関わりの意図

- ・勝つためにはどうすればよいかを自分たちで考えてほしいと思い、ヒントになるような声かけだけをして、子どもたちに任せて見守ることにした。
- ・リレーが終わった後、自分たちの失敗を口々に言ったので、全員が一生懸命頑張ったことを認め、次の活動の意欲に繋がるような声をかけた。

○この時期に大切にしておきたいこと

- ・自分の力を精一杯出し、最後まであきらめない気持ちを大切にしたい。
- ・自分の思いを話し、友達の思いも聞きながら、力を合わせて活動をする楽しさや、やり遂げた時の達成感を味わってほしい。
- ・幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の、自立心や健康な心と体、協同性などの姿にもつながっていく。

～学習意欲（思考力の芽生え等）～

「学習意欲」とは、学ぼうとする姿勢です。「やってみたい」「もっとがんばろう」など、遊びの中でも見られる姿です。

「小学校入学前の生活に関する振り返り調査」（2016年7月、ベネッセ）において、「遊びなどの中で、何かができる達成感を味わう」「絵本などを読んで喜んだり、悲しんだりする」を始めとして、小学校入学前に「感情を伴う経験」が多くあった子どもは、これらの経験が少ない子どもに比べて、小学1年生の時に学習意欲、学習の主体性、自己肯定感をもっている割合が高いことが分かりました。

遊びの中で、有意義な経験に導いていくのが保育者の援助です。

「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」「保育所保育指針」に示される「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のうち、特に「思考力の芽生え」と関連するものであり、その内容を踏まえた教育・保育実践を示しています。



子どもの発達と遊びの姿～学習意欲（思考力の芽生え等）～

事例C-1

友達のしていることに興味をもち、保育者の優しい言葉かけや援助で、自信をもち、繰り返し試してみようとする意欲が生まれます。達成感がもてるように、与えるものや順番、声かけなどを工夫することが大切です。



事例C-2

友達の様子に刺激を受けながら、自分の活動を少しずつ広げることで、子どもたちの遊びは広がります。興味や発達段階に合わせて、無理なく自己を発揮できる場面をつくりましょう。



0歳

1歳

2歳

事例C－3

「〇〇遊び」と名前の付くような活動でなくても、子どもにとっては大切な経験であり、重要な遊びです。存分に環境に関わる時間を保障することが大切です。



事例C－4

遊びへの目的をもち、考えたり試したりしながら最後までやろうとする気持ちが継続するように、子ども一人一人の発達や願いに応じて援助することが大切です。



事例C－5

これまでの遊びの積み重ねの上で、更に遊びの中で試行錯誤するようになります。これまでの経験をうまく利用しながら新しい方法を考える手助けをしましょう。



3歳

4歳

5歳

事例C－1

学習意欲（思考力の芽生え等）

○歳児 「ポットン落としたい」

ペットボトルのふた落としの玩具で遊んでいる。

A児も一緒にするが、指先にうまく力が入らず、ふたが缶に入らない。

「難しいね。こうやってぎゅって押してごらん。」と、手を添えて一緒にやって見せる。保育者に手伝ってもらって、ふたが入り「できた。」という嬉しそうな表情で、保育者を見る。

「やったあ、できたね。」と一緒に喜ぶと、A児は今度は、自分だけしようとするが、なかなか入らない。

A児は、他の友達の様子を見て、いろいろな缶にふたを入れようとする。

最初使っていた缶を持ってきて、「もう一回、これでやってみようか。」とA児を誘い、保育者が手伝いながらやっていたが、やっと自分でふたを缶に入れることができた。

それがきっかけで、繰り返し遊びを楽しむことができた。



○子どもの姿

- ・友達が、缶の中にペットボトルのふたを落として遊んでいるのを見て同じように遊び始めた。

○保育者の関わりの意図

- ・できたことを認め、一緒に喜ぶことで、もっとやってみようという気持ちをもてるようにしたい。
- ・なかなかふたが入らないが、保育者と一緒にすることで方法が分かり、自信をもって、繰り返し遊べるようにしたい。

○この時期に大切にしておきたいこと

- ・保育者との受容的・応答的な関わりのもとで、思いや欲求を伝えようとするようになる。
- ・指先を使って、つまんだり、つかんだりする遊びをする中で、手指の発達が見られる。できるようになることで、指先を使う他の玩具も挑戦し、遊びを楽しむようになっていく。
- ・できた喜びを保育者と共に感し合うことが次への意欲につながる。

事例C－2

学習意欲（思考力の芽生え等）

○歳児 「登れるかな降りられるかな」

子どもたちが保育室にある乳児用滑り台で遊んでいる。A児は、友達が一人で滑り台の上まで登り、おしりで滑っていく様子を見ていた。

しばらくして、滑り台の階段を下からゆっくり登っていくA児。あともう一段というところで躊躇し、進んでは戻ることを繰り返している。

「Aちゃん、ここまでおいで。」と、滑り台のところから呼ぶと嬉しそうに笑うが、やはり頂上までは登れずにいる。

A児の身体の動きに合わせ、保育者が「よいしょ。よいしょ。」「上手だよ。」と声をかけていくと、笑顔を見せ、ついに頂上まで登ることができた。

保育者が近くに寄り添いながら「登れたね、うれしいね。」と話しかけたが、今度は降りる不安があるのか表情が硬い。A児の体を支えながら「おしりズリズリしようか。」と降り方を知らせると、下まで降りることができた。「やってみたい」が「できた」に変わり、A児は満足そうな表情だった。

コツをつかんだA児は、その後、保育者に見守られながら、繰り返し登り降りを楽しんでいた。

○子どもの姿

- ・A児は、友達の様子を見て「自分もやってみたい」という思いを抱いていた。
- ・自分の手足、体をどう動かせば上手くできるのか、分からぬ状態であった。



○保育者の関わりの意図

- ・少し怖いと思いながらも、ほめられたり促してもらったりしながら、A児の「やりたい気持ち」が維持できるようにしたい。
- ・保育者に見守られながら挑戦して、登り降りの感覚をつかめるようにしたい。

○この時期に大切にしておきたいこと

- ・○歳児の運動機能の発達は十分ではなく、これから様々な体験を通して成長していく。
- ・子どもは、「やってみたい」という思いで、自分の手足、体をどう動かせばよいのか、試したり考えたりする。
- ・保育者が子どもの気持ちを受け止め、「できた」という達成感を味わえるような援助を積み重ねることで、更なるステップへの意欲につながる。

事例C－4

学習意欲（思考力の芽生え等）

4歳児 「自分でできた」

2、3日前から数名の子どもがカップに花はじきを入れて机の上に並べ、かき氷やさんごっこが始まった。

周りの友達（お客様役）が紙やマジック、はさみ等を使って財布をつくっているのを見て、A児もつくりたいという気持ちをもち、つくり始めるが、どのようにすればよいのかが分からず保育者に聞きに来た。

初めは「友達につくり方を聞いてみようか。」と声をかけるが、自分でつくりたい様子であった。

「中にお金を入れるなら袋にしなければいけないね。紙を半分に折ってみたらどうかな。」とA児に伝える。

半分に折った紙の間に手作りのお金を入れるがこぼれてしまい、何度か試している。

保育者が「紙をくっつければ袋になってこぼれないかもね。どうしたらくっつくかな。」と声をかけてみた。少し考えて、セロハンテープでとめることを思いつき早速試す。

うまく袋になると「できた。これでお金入る。」「絵をかいたら○○のって分かるんちゃう。」と嬉しそうに絵をかき始めた。

○子どもの姿

- ・友達が紙に絵をかいてハサミで切って遊んでいた姿を見て、A児も製作遊びに興味をもち始めていたところであった。しかし、自分のつくりたい物をどのように形にすればよいのかが分からず戸惑う姿があった。

- ・友達に聞いて教えてもらうことも恥ずかしそうにしていた。

○保育者の関わりの意図

- ・友達に聞いたり教えてもらったりして、子ども同士の関わりの中で何か発想が生まれればよいと思い、友達と関わるように声をかけた。

- ・子どもの様子を見ながら少しヒントになる言葉を出し、試したり工夫したりすることで、方法を自分で見つけ達成感を味わったり、つくる楽しさを知ったりできるようにした。

○この時期に大切にしておきたいこと

- ・遊びの中で友達のしていることを真似たり、一緒に会話を楽しんだりしながら友達との関わりをもつことができるようとする。

- ・「〇〇したい」という意欲を大切にしながら自分で試したり工夫したりする経験を積み重ね、充実感や達成感を味わい自信につなげるようとする。

- ・保育者は一人一人の思いやイメージを十分受け止め、周りの友達と共有して楽しめるよう仲立ちをする。

事例C－5

学習意欲（思考力の芽生え等）

5歳児 「樋（とい）つなぎ」

5月下旬、砂場で水を溜めて水たまりにしたり、魚や星の型抜きを浮かべて海をつくったりして遊ぶ様子があった。

6月上旬、樋（とい）や台となるものを準備しておいた。A児は、やかんに水を入れて砂場まで運んでいたが、水道の蛇口から砂場まで、樋を繋げて水を流すことと思いついた。しかし、樋が下を向いたり、地面と平行に設置されてたりするため、水が思うように流れない。どうすれば水が流れるか子どもに尋ねると、「樋が下を向いてるからだめだ。」「樋の下に何か置けばいい。」「斜めに樋を傾けてみる。」と子どもなりに考えたことを試す。

A児とB児は、遊びが続くにつれて、樋と樋を洗濯バサミで固定し、長くしたり、ビールケースで高低差をつけたりして水流しを楽しむようになった。

「なるほど、高さか。いいことを考えたね。」と子どもたちの考えを認めた。

また、B児が樋をU字型につなげて水を流そうとすると、周りにいた子どもが興味を示し、「こうしたら。」と意見を出し合い、一緒に実現しようと試行錯誤する様子が見られた。「みんなで考えたの。すごいね。工夫してつくったんだね。」と声をかけると、みんな満足そうな表情を見せた。

○子どもの姿

- ・A児は、今まであまり遊びが継続しない様子だった。
- ・砂場で遊ぶようになると、自ら考えたことを試す姿が増え、自分の思いを実現できしたことや、保育者や周りの友達に認めてもらったことが喜びとなり、継続して遊びを楽しむ様子が見られた。

○保育者の関わりの意図

- ・思うように水が流れないのはなぜかを、試行錯誤しながら考えられるようにしたい。
- ・A児が気付いたことを周りの子どもに知らせたことが、友達と一緒に遊びを進めていくきっかけになった。
- ・考えたことや発見したことを保育者が認め、他児に発信することで、遊びが共有され、深まってほしい。

○この時期に大切にしておきたいこと

- ・遊びの中の成功体験を積み重ねることで、子どもの自信につながり、新たな遊びのアイデアやひらめきが生まれ、更なる意欲につながるのでないか。
- ・個々の遊びを充実すると共に、友達の遊びへの興味や関心を広げることで、協同した遊びへとつながっていく。

幼児期の遊びの意味～5歳児の遊びから～

ここでは、子どもが夢中になる遊びの中に見える学びを、事例を通して見てみましょう。

幼児期の遊びは、身近な環境に関わり、子どもの興味・関心を生かしながら発展していきます。楽しみながら学びを追究する子どもの姿は、何日も続いたり、時には一定期間をおいた後、盛り上がることもあります。

6月頃、5歳児が砂場で桶（とい）を使って水を流す遊びは、多くの園・所でよく見られる光景です。高低差を付けて流したり転がしたりする遊びは、3歳児の頃、どんぐりを転がして遊んだ経験などから発展していきます。



この園では、6月に砂場で経験した遊びが、秋にはビー玉転がし装置に発展しました。つなぎ方や壁の高さ、支柱の立て方などを少しづつ試しながら工夫しています。



すべてを与えるのではなく、「こんなものがあるとここに使えるんだけど…。」などの意見を引き出しながら、何日も取り組みました。

子どもの努力と工夫の詰まったビー玉転がし装置は、園内作品展で展示されました。



作品展後、5歳児の作品に憧れ、影響を受けた4歳児が、保育室でどんぐり転がしをつくり始めました。



このように、就学前教育施設での遊びは、互いに影響し合い、学びが深まっていきます。

IV 研修の展開例及び研修資料～実践から評価・改善へ～

よりよい教育・保育を展開するためには、保育者自身が教育・保育を振り返ったり、幼児理解を深めたりする機会をもつことが大切です。そのための園・所内研修の方法や平成29年度の「奈良県版就学前教育プログラム」に収録した実践事例を基に作成した研修資料を本章にまとめました。

各園所における研修の充実や、質の高い教育・保育実践に役立てていただきたいと考えています。

IV 研修の展開例及び研修資料～実践から評価・改善へ～

就学前教育に係る研修資料～実践事例から深める～

本資料は、平成29年度「奈良県版就学前教育プログラム」モデル園・所における実践事例を、園・所及び市町村等の研修で活用できる「研修資料」として編成しました。

場面を思い描いたり、類似した事例を出し合ったりしながら、幼児理解を深め、保育構想力を高めましょう。

ワークショップ型の園・所内研修（例）

奈良県立教育研究所就学前教育センター リフレッシュ「はぐくむなら 園内研修編」より

チームとしての人間関係が強いほど、教職員間で共通の目的をもっています。それが、同僚性やチームワークを生み、悩みを相談したり助け合ったりする園・所の雰囲気につながります。

- ・教職員間のコミュニケーションの充実
- ・園・所の目標や保育内容、研究主題などの共有
- ・自ら考え、行動する教職員集団づくり

これらの実現に向け、ワークショップ型の研修を取り入れてみてはいかがでしょうか。

（1回目）関係性を深める

- ・各教職員の思いや考え方を十分に出し合い、互いのことをよく知り、安心して話すことのできる関係性をつくりましょう。
- ・議論ではなく、対話を心がけましょう。
- ・「ワークショップで大切にしたいこと」を伝えましょう。

<ワークショップで大切にしたいこと>

- ・自分が感じていることを素直に話す。
- ・相手の話に対する評価、否定、批判は避け、共感的に聞く。
- ・同じ目線で一緒に悩み考える。
- ・偏見をもったり、ここでの話を他人に話したりしない。

テーマに対する一人一人の考え方を発言し、教職員同士の理解を深め、目的を共有し、課題解決への意識を高めましょう。

(2回目以降) 課題解決への意欲を高める

1 目的の共有、ルールの確認

- ・今回のワークショップの目的を説明する。
- ・「ワークショップで大切にしたいこと」を伝える。



2 テーマについて現状を共有する



3 テーマについて「ありたい姿」を話し合う

- ・テーマについて、どうありたいのかを出し合う。
- ・理想や期待、実現が難しそうなことでもよい。



4 話し合ったポイントをまとめる

- ・ありたい姿に近づくために、重要だと思うポイントをグループでまとめる。



5 全体で話し合ったことを共有する

- ・複数のグループがある場合は、全体の場で発表する。



6 これからできることを書く

- ・学んだこと、テーマについて今後、自分ができることを書く。

<進行役のポイント>

- ・「ワークショップで大切にしたいこと」は、毎回伝えましょう。
- ・発言していない人がいれば話すよう促してみましょう。
- ・話しやすい雰囲気をつくりましょう。

研修資料及び展開例

【研修資料1】

【C3】ドングリのコマをまわす

環境設定
保育室 ドングリのコマ 絵の具 筆

内容 4歳児
ドングリのコマを回して遊んでいる。最初、うまく回せずに戸惑っている

★こんな場面がありましたか？その時あなたはどうしましたか？まず思い出しましょう

子ども	コマをうまく回したい	保育者(教員)のサポート
ドングリのコマをうまく回せない	「Aくん、うまく回しているよ」一緒にA児の様子を見る	一緒に見守り、応援する
「Aくん、なんでそんなに回るん？」友達の様子を見る	子どもの喜びに共感する	子どもと一緒に絵の具の準備をする
真似をしながら、繰り返し回して遊ぶ、徐々に上手に回せるようになってくる	子どもの意見を受け入れながら活動を展開する	
「僕のコマって分かるように色を塗りたい」		
自分の考えを言うことにより、実現できる体験ができ、次への意欲につながった		

健康な心と体	自立心	協同性	道徳性・規範 社会生活との 意識の芽生え	思考力の 芽生え	自然との 関わり ・生命尊重	数量・图形、文字等 への関心・感覚	言葉による 伝え合い	豊かな感性絵まい と表現
0	0	0		0	0			0

考えてみましょう

1 場面を思い描き、その中に見られる「幼児期の終わりまでに育つてほしい姿」とその具体的な様子を出し合ってみましょう。

健康な心と体	自立心	協同性	道徳性・規範意識の芽生え	社会生活との関わり
思考力の芽生え	自然との関わり ・生命尊重	数量・图形、文字等 への関心・感覚	言葉による伝え合い	豊かな感性絵まい と表現

2 子どものやってみたい思いや考え方を受け止め、それが実現できるようにするには、保育者はどのように援助したり環境を準備したりすればよいでしょうか。

- 子どもの意見を受けとめ、それが実現できる体験を繰り返し経験できるようにするには、保育者はどのような環境を準備すればよいのでしょうか
- この子どもは、今後困難にぶつかった時にどんな対応をするでしょうか

【研修資料2】

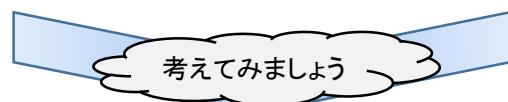
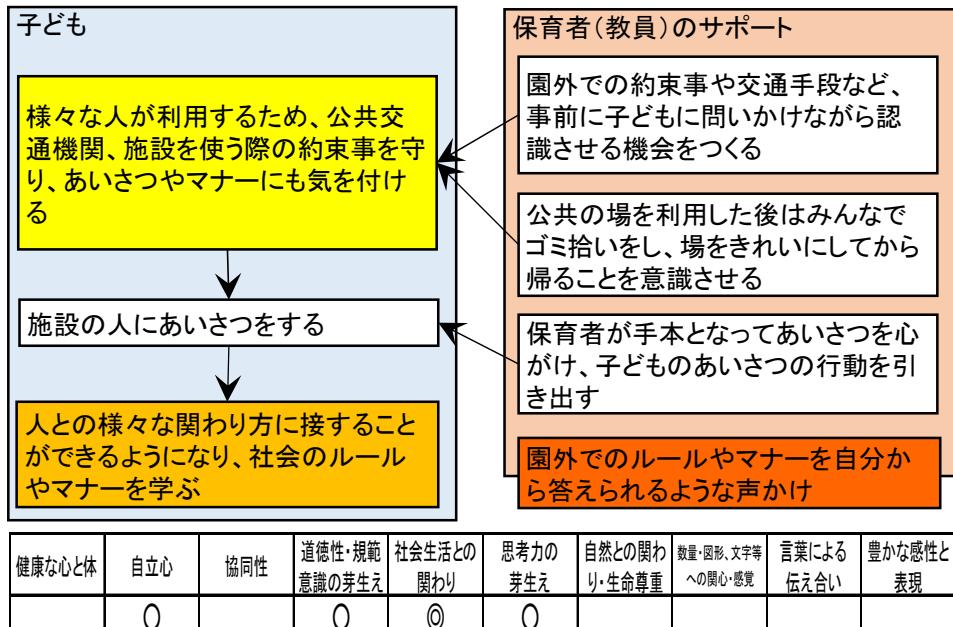
【E4】公共施設へ出かける

環境設定
公園・施設

内容 5歳児

園外の公園や施設へ出かけて遊んだり学んだりする。

★こんな場面がありましたか？その時あなたはどうしましたか？まず思い出しましょう



- 自分ならどう関わりますか
- 3歳児や4歳児ならどう関わりますか
- 体験から遊びの発展を想像してみましょう

1 3歳児や4歳児の保育では、どのような関わり方ができるでしょうか。

2 この体験から、どのような遊びにつなげていけるでしょうか。発展させた遊びをイメージして、アイデアを出し合ってみましょう。

【研修資料3】

【C6】水と砂の爆発や

環境設定

砂場 スコップ 水 水を汲む容器 筒(竹製でもプラスチック製でも可能)

内容 5歳児

数人の子どもが砂場遊びの場面で水を流して川を作っている。

★こんな場面がありましたか？その時あなたはどうしましたか？まず思い出しましょう

子ども 砂と水の爆発をつくりだしたい

A児「先生、もっと道具を出してほしい。川をつくるねん」

始めは、トンネルとして活用していたが、途中から筒を立て砂を詰め、筒を一気に抜く遊びをはじめた。最初のうちは砂が出てくるだけで面白みがなかったが、砂と水を交互に入れたり、配分を変えたりしながら、筒抜きを繰り返した。B児「先生来て来て、びっくりするのができたよ」

保育者の声かけで他の子どもたちも集まってくる。A児・B児らは「せーの」の声かけで筒を外す。すると、一気に砂と水が流れ出す

道具の新しい使い方を考え、新しい遊びを作り出した

保育者(教員)のサポート

「こんなのがいるかな？」と、筒(トンネル型)を1つ出す



「何？どうしたん？」

「わあー、本当にびっくりしたよ。爆発みたいやわ」

子どもが興味関心を保持する素材と活動を提供し、目標を成し遂げるための十分な時間の確保をした

健康な心と体	自立心	協同性	道徳性・規範 社会生活との 意識の芽生え	社会生活との 関わり	思考力の芽生え	自然との関わり ・生命尊重	数量・や图形、標識 や文字などへの関 心・感覚	言葉による伝え合い	豊かな感性と表現
	0		0		0	0			0

考えてみましょう

○この事例の「振り返り」の時間に、どのように進めるとさらに教育的效果は高まるでしょうか

○子どもと感動を共有できた経験を出し合ってみましょう

1 場面を思い描き、その中に見られる「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とその具体的な様子を出し合ってみましょう。

健康な心と体	自立心	協同性	道徳性・規範意識 の芽生え	社会生活との 関わり
思考力の芽生え	自然との関わり ・生命尊重	数量・や图形、標識 や文字などへの関 心・感覚	言葉による伝え合い	豊かな感性と表現

2 この事例の「振り返り」をどのように進めるといいでしょう。上記の姿のうち、何に焦点を当てるか、どのように展開するかなど、その意図も含めて考えましょう。

3 子どもと保育者が「わくわくする」場面から、保育を振り返り、「保育わくワークシート」に記入してみましょう。また、それをもとに「保育ほっとホットトーク」をしてみましょう。

※保育わくワークシートは、P 45からを参照

【研修資料4】

【C1】 数を数える(セミのぬけがら、いっぱい見付けたよ)

環境設定

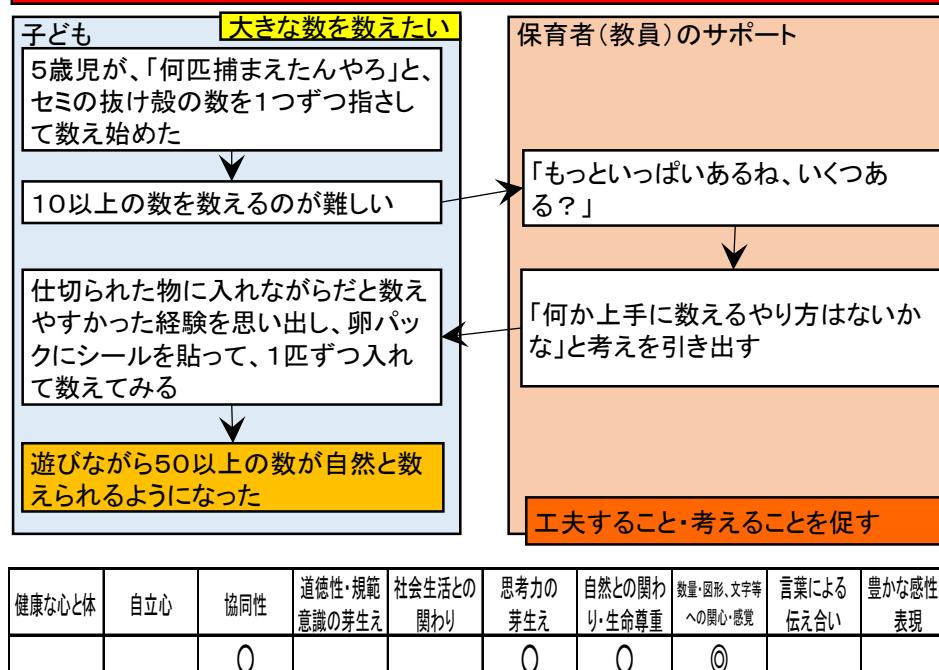
園庭 虫取り網、虫かご、卵パック、シール、フェルトペン

内容

5歳児

子どもが見付けて集めていたセミの抜け殻を数え始める。

★こんな場面がありましたか？その時あなたはどうしましたか？まず思い出しましょう



- 卵パック以外に、数を数えやすくするものは何がありますか
- 大きな数を数えられるようになったこの子どもは、どんな遊びを考えそうですか
- 数遊びは他にどんな例がありますか

1 セミのぬけがらの数を数えようとするとき、卵パック以外にどのような方法があるでしょうか。

2 大きな数を数えられるようになった子どもは、どのような遊びを考えそうですか。イメージを膨らませて考えてみましょう。

3 子どもたちが数を数える遊びには、どのようなものがあるでしょうか。発達段階を踏まえて、意見を出し合ってみましょう。

V 明日の“楽しい保育”につながる保育記録の工夫

質の高い教育・保育の実現のためには、取組の評価と改善が大切です。教育・保育を記録し、そこから子ども理解や環境構成の在り方等を見直し、次の取組に生かします。

本章では、奈良教育大学附属幼稚園が研究開発した、「保育ほっとホットトーク」と「わくワークシート」を紹介します。

明日の“楽しい保育”につながる保育記録の工夫

奈良教育大学附属幼稚園の研究

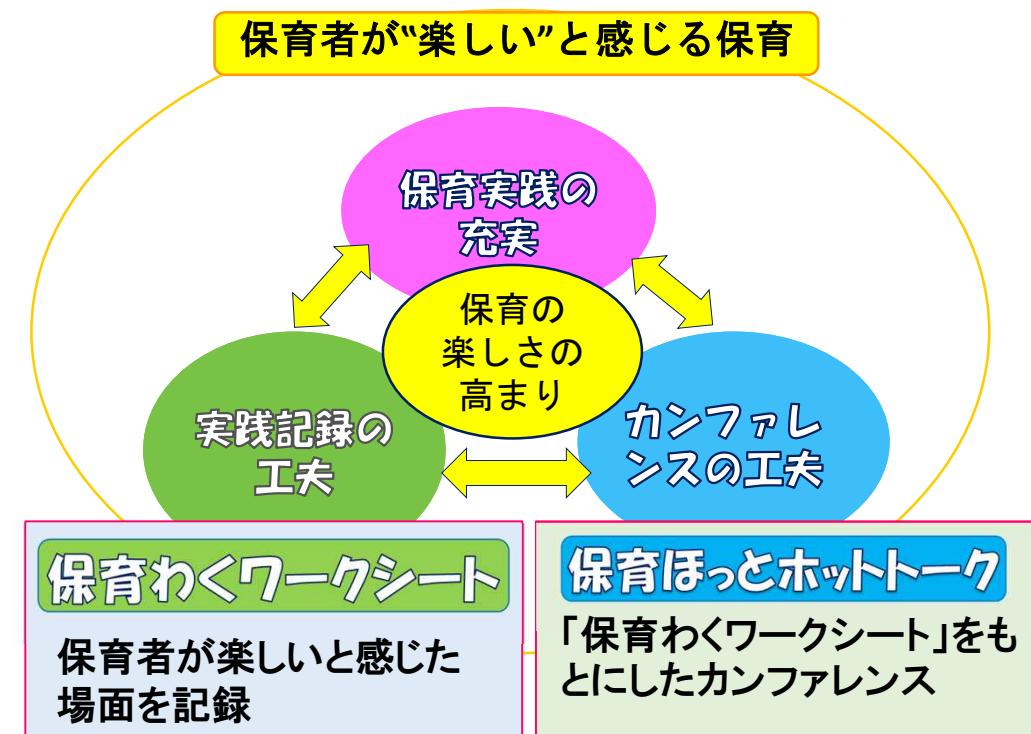
～「子どもたちの未来につながる“楽しい保育”の追及」から～

1. “楽しさ”から始まる保育

子どもは“楽しい”から遊び、“楽しさ”の中で学びます。それは、保育者も同じです—子どもの“楽しさ”を見つめ、共感する。“楽しさ”の中の学びを見取り、さらなる“楽しさ”と学びを生み出す環境構成や援助を行う—子どもの“楽しさ”は保育者の“楽しさ”でもあります。「保育者が“楽しい”と感じる保育」をすることから始めましょう。

2. 「保育者自身が楽しいと感じる保育」をするために

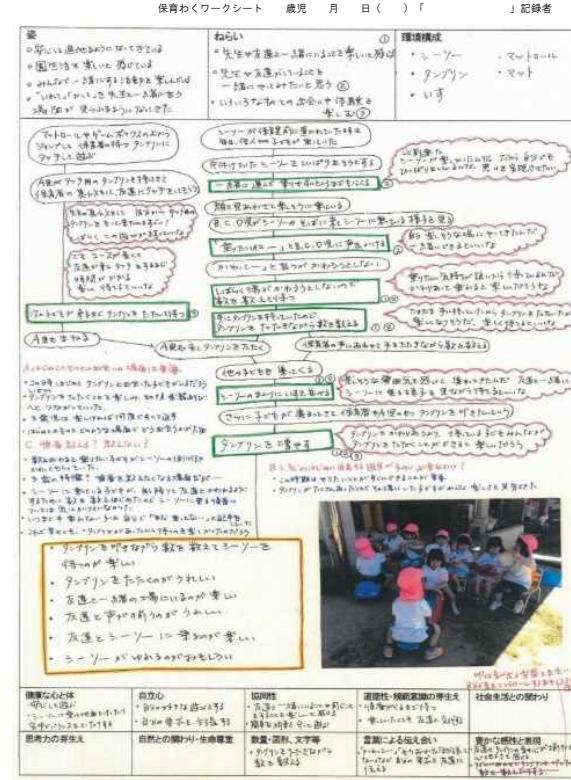
保育者が“楽しい”と感じたことから記録する「保育わくワークシート」と、そのシートをもとに語り合う「ほっとホットトーク」で、意欲を高め、保育の質の向上を目指しましょう。



3. 「保育わくワークシート」と「保育ほっとホットトーク」の効果

保育わくワークシート とは…

- ・保育者が「楽しい」と感じた保育場面を記録するシートです。
 - ・「楽しい」と感じたことから書き始める
⇒ 楽しい気持ちで保育を振り返ることができる
 - ・30分程度で書きたいところ、書けるところを書く ⇒ 気軽に書ける
 - ・援助や環境構成のきっかけとなった思いを書く
⇒ 保育者の思考が可視化される



保育ほっとホットトーク とは…

- ・**保育わくワークシート** を使ったカンファレンスです。
 - ・記録者は一番楽しかった場面を語り、参加者は気付いたことや質問を自由に発言する ⇒ 保育の喜び、奥深さを共有できる
 - ・話し合いながらシートを完成させる
⇒ 子ども理解が深まり、参加者全員の保育力が向上する
 - ・記録者の悩みの解決や、次の日の保育につながる
⇒ 保育者のモチベーションが上がる
 - ・楽しい場面発信のため、互いを認め合うことができる
⇒ 同僚性が高まる



4. 「保育わくワークシート」の書き方

①保育者が“楽しい”と感じた場面を書く、写真を貼る

保育わくワークシート 歳児 月 日（ ） 「 」 記録者

姿	ねらい	環境構成
楽しい場面の写真を貼る		

保育者が楽しいと
感じた場面を書く

楽しい場面の写真を
貼る



●この欄には「保育者が“楽しい”と感じた場面」の子どもの姿を記入する。

●箇条書きで思いつくままに書くとよい。

●この部分だけでも書きためていくことで保育者のモチベーションアップにつながる。

【子どもの育ち】（幼児期の終わりまでに育ってほしい姿）				
健康な心と体	自立心	協同性	道徳性・規範意識の芽生え	社会生活との関わり
思考力の芽生え	自然との関わり・生命尊重	数量・図形、文字等への関心・感覚	言葉による伝え合い	豊かな感性と表現

（保育わくワークシート：奈良教育大学附属幼稚園2017）

②楽しい場面までの展開、保育者の考え方や援助を記入

保育わくワークシート		歳児	月	日()	「」記録者										
姿	ねらい	環境構成													
【子どもの育ち】(幼児期の終わりまでに育ってほしい姿) <table border="1"> <tr> <td>健康な心と体</td> <td>自立心</td> <td>協同性</td> <td>道徳性・規範意識の芽生え</td> <td>社会生活との関わり</td> </tr> <tr> <td>思考力の芽生え</td> <td>自然との関わり・生命尊重</td> <td>数量・図形、文字等への関心・感覚</td> <td>言葉による伝え合い</td> <td>豊かな感性と表現</td> </tr> </table>						健康な心と体	自立心	協同性	道徳性・規範意識の芽生え	社会生活との関わり	思考力の芽生え	自然との関わり・生命尊重	数量・図形、文字等への関心・感覚	言葉による伝え合い	豊かな感性と表現
健康な心と体	自立心	協同性	道徳性・規範意識の芽生え	社会生活との関わり											
思考力の芽生え	自然との関わり・生命尊重	数量・図形、文字等への関心・感覚	言葉による伝え合い	豊かな感性と表現											



- 「保育者が“楽しい”と感じた場面」につながる「子どもの遊んでいる様子」と「保育者の援助」を思い起こしながら、上から順に書いていく。
- 援助の側に吹き出しつけ、その援助の根拠となった「保育者の思い・考え方・ねがい」を書く。

- 保育を振り返ることで、自分の援助に根拠のあることや、その援助が子どもの姿にどのように影響を及ぼしたのかについて気付くことができる。
- 「保育者の思考の見える化」により、保育ほっとホットトークの重要な観点の1つである援助と遊びの展開について深い学び合いができる。

③子どもの姿、ねらい、環境構成、子どもの育ちなど記入

保育わくワークシート 歳児 月 日() 「 」 記録者

姿 ○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○	ねらい ○○○○○○○○○○○○.....① ○○○○○○○○○○○○.....② ○○○○○○○○○○○○.....③	環境構成 ○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○○○										
<p>【子どもの育ち】(幼児期の終わりまでに育ってほしい姿)</p> <table border="1"> <tr> <td>健康な心と体</td> <td>自立心</td> <td>協同性</td> <td>道徳性・規範意識の芽生え</td> <td>社会生活との関わり</td> </tr> <tr> <td>思考力の芽生え</td> <td>自然との関わり・生命尊重</td> <td>数量・図形、文字等への関心・感覚</td> <td>言葉による伝え合い</td> <td>豊かな感性と表現</td> </tr> </table>			健康な心と体	自立心	協同性	道徳性・規範意識の芽生え	社会生活との関わり	思考力の芽生え	自然との関わり・生命尊重	数量・図形、文字等への関心・感覚	言葉による伝え合い	豊かな感性と表現
健康な心と体	自立心	協同性	道徳性・規範意識の芽生え	社会生活との関わり								
思考力の芽生え	自然との関わり・生命尊重	数量・図形、文字等への関心・感覚	言葉による伝え合い	豊かな感性と表現								

- 「保育者が“楽しい”と感じた場面」に関連することに絞って、「姿」「ねらい」「環境構成」を記入する。
- 「ねらい」の上から順に番号を付けて、援助の根拠となったねらいの番号をそれぞれの援助の横に書く。
- 最後に「子どもの育ち」を記入する。

- シートに書き込んでいくことで、子どもの姿とねらいの整合性、ねらいと環境構成や援助の適合性など自分の保育を振り返ることができる。
- 「子どもの育ち」の欄の項目は、自由に設定する。「幼児教育において育みたい資質・能力」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」、「主体的・対話的で深い学び」、「教育目標」などを設けることで、多面的に子どもの育ちをとらえることができる。

④保育ほっとホットトークで出たこと、気付いたことを記入

保育わくワークシート 歳児 月 日 () 「 」 記録者

【子どもの育ち】(幼児期の終わりまでに育ってほしい姿)

健康な心と体	自立心	協同性	道徳性・規範意識の芽生え	社会生活との関わり
思考力の芽生え	自然との関わり・生命尊重	数量・図形、文字等への関心・感覚	言葉による伝え合い	豊かな感性と表現

- 「保育わくワークシート」をもとに「保育ほっとホットトーク」を行った場合は、語り合ったことで新たに気付いたこと、理解を深めたこと、次の保育の構想につながるようなことなどを関連する場面の近くにメモをする。
 - 「子どもの姿」「ねらい」「環境構成」「子どもの育ち」の項目については、みんなで話し合いながら、加筆していく。
 - 保育ほっとホットトーク中または後に記入する部分は赤字または青字で色を変えて記入する。
 - 余白に記録者（担任または実践者）の感想をまとめて書いておくことで自身の学びの軌跡が残っていく。

- 対話の中で、子どもや保育の在り方について新しい気付きを得ることができる。また、保育の楽しさ、喜び、奥深さなどをみんなで共有することで、保育意欲の向上につながる。
 - 話し合ったことを集積することで、「年齢の特性」「保育者が“楽しい”と感じる保育をするための環境構成や援助のポイント」を明らかにことができる。

5. 「保育わくワークシート」と 「保育ほっとホットトーク」 の実践例



タンブリンははじめから出していたの？



ジャンプタッチ遊び用に3個出して
いたよ。

タンブリンの音や楽しそうな雰囲気につられて子どもたちが集まってきたから、椅子を増やしたよ。

はじめは手を叩いていた子どもも、タンブリンを叩きたいといったので、慌てて数を増やしたよ。



3歳児のはじめは遊具の数は多めにと指導計画に書いているけど、まさにその必要性がわかる場面だね。



少ない数の物を共有することも大切だけど、この場合はたくさんあつたからこそ楽しく遊べたんだね。



椅子に座っている順番にシーソーに乗ったのかな？



シーソーにまだ乗っていない子どもが、数え終わったら自分から乗りにいったよ。シーソーに乗っている子どもが待っている友達に替わるために始まった遊びだから、順番にしようとは思ってなかったよ。



私なら順番に替わるように教えたかもしれないわ。



まだ乗っていない子どもがいたら「○○ちゃんはまだだね」とお互いが思い合えれば幸せだね。



3歳児にとったら打楽器は自分の思い通りに音が出せることができないと感じるポイントじゃないかな。



<保育ほっとホットトークを終えて 記録者が学んだこと>

●3歳児らしい姿や保育が、他学年の保育者にとって新鮮に感じられたことが話のきっかけとなり、「物との出会い」「遊具や用具の数」など3歳児のこの時期のねらいや環境構成のポイントにつながるトークとなった。

●「ほっとホットトーク」の中で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を記入する時に「自分で音をコントロールできる」という打楽器の特性が3歳児にとっては楽しいと感じるポイントであり、やがてリズムに合わせて叩くことにつながるということを学んだ。

●「順番をどんな場面で教えていくのか」については、3歳児ならではというよりも保育者の価値観によるところが大きいかもしれない。自分の価値観や援助の傾向などについて考えるきっかけとなった。



VI 小学校教育を見通した幼児期の学びの在り方と 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」 ～幼小接続推進力～

子どもは、園・所で友達や保育者と遊びを通して成長し、幼児期の教育を終えて小学校に就学していきます。小学校入学後に、子ども一人一人が十分に力が発揮できるよう、小学校以降の生活や学びを見通して教育を行うことが必要です。

本章では、小学校教育を見通した幼児期の保育の展開についてまとめています。また、「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」「保育所保育指針」に共通して示されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、5歳児になって突然に現れるものではありません。3歳児から5歳児までに見られる姿として示し、その姿に至るまでの発達過程をイメージできるようにしています。

小学校教育を見通した幼児期の学びの在り方と 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」～幼小接続推進力～

小学校教育を見通した幼児期の学びの在り方と接続期の実践事例

今求められる幼小接続の方向性とは

幼児教育と小学校教育を比較してみると、子どもの生活や教育の在り方は異なっています。しかし、子どもの育ちはもとより、「学ぶ」という行為はつながっています。幼児教育と小学校教育の教育内容や指導方法の相違点・共通点を理解していくことが求められています。

小学校学習指導要領において、「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。」と示されています。幼児期に遊びを通して育まれてきたことを各教科等での学習につなげていくことが求められています。

そのためには、就学前教育の中で、子どもたちがどのように成長し、学びを深めているかを理解し、小学校に発信していくことが重要です。

実践事例 大和高田市

市内研修の工夫

教員がつながれば、子どももつながる

(実施者)
大和高田市

市内で行う幼小接続研修の対象者を広げた。学校教育課を中心となり保育課と連携したり、私立園に研修の意図や大切さを伝えたりし、市内の就学前教員と小学校教員が共に学び合う研修とした。(就学前指導主事、小学校指導主事も参加)

取組の目的、意図
市内には公立私立合わせて23の就学前施設があり、そこから市内8小学校へ入学する。そこで、それぞれの園所における子どもたちの生活や活動、学びを理解し合い、就学前と小学校がつながる為に出来ることを考えた。

なぜなら・・・ みんな「高田っ子」



研修方法の工夫！



研修は講演だけでなく、校区やブロック別でのグループワークを入れました。
Point 1 会話が弾みます！



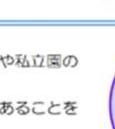
Point 2

園生活の一場面における学びの読み取り。五領域、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』から小学校の教科等へつなげました。

研修内容の工夫！

☆成功のカギは…

研修会毎にアンケートを取り、就学前・小学校教員の「したいこと」「困り感」などを把握し、次回の研修内容に生かしています。



成果
○本市では、あまり交流がなかった小学校と公立保育所や私立園の教員が交流をもてる研修の場となった。
○小学校教員・・・遊びの中には教科書のない学びがあることを知れた！
○就学前教員・・・幼児期に培った力が小学校での学びに、つながっていることを研修で実感できた！

実践事例 生駒市

私立保育園と公立幼稚園交流

地域の中でのつながりが、安心感へ

(提案者)
社会福祉法人晋栄福祉会
いちぶちどり保育園

地域主催の雪まつりにともに参加し、遊びを通して関わりをもったことがきっかけとなり、私立保育園・公立幼稚園がつながった。平成29年度よりモデル地域に指定され、保幼小接続事業の取組が本格的に行われることになった。

POINT!

★交流を行うまでの保育園としての課題★

- 登園時間に差があること
- いろいろな小学校に就学すること
- 交流活動に応じて給食時間等の調整が必要なこと

☆園として行ったこと☆

- ◎参観前、送迎時などに保護者に交流時間までに登園することを伝え、協力を求めた。
- ◎小学校との交流を通して、小学校の場に慣れるなど、交流の意義を保護者に啓発した。
- ◎無理のないスケジュールで交流計画を立てた。
- ◎それぞれの施設の特徴を活かした交流の内容を考えた。

★成 果★

- ・交流を深めることで子ども同士が顔見知りとなり不安なく、自信をもって就学できるようになった。
- ・小学校を身近に感じ、期待感や安心感をもてた。
- ・保護者にとっても小学校との交流活動が就学に対しての不安解消につながった。

保育園での交流



交流を深めることで

- ・一緒に遊ぶ姿が見られ主体的に遊びが広がる様子が見られた。
- ・お互い刺激を受け合意的につながりを取り組む姿が見られるようになった。

- ・同地域の友達と関わり、安心感をもちながら就学への意欲を高められた。

- ・小学校での学びに繋がる共通した遊びと一緒に楽しむことができた。
- ・保幼交流に刺激をうけ、近隣の保育園とも交流をもつ、きっかけとなった。

私立保育園+公立幼稚園

地域の小学校との交流

- ・同じ志分地域の保育園の子どもたちとも交流「また、遊びようね！」
- ・地域の協力を得て、つながっていくことで保護者、子どもたちの不安が解消された。

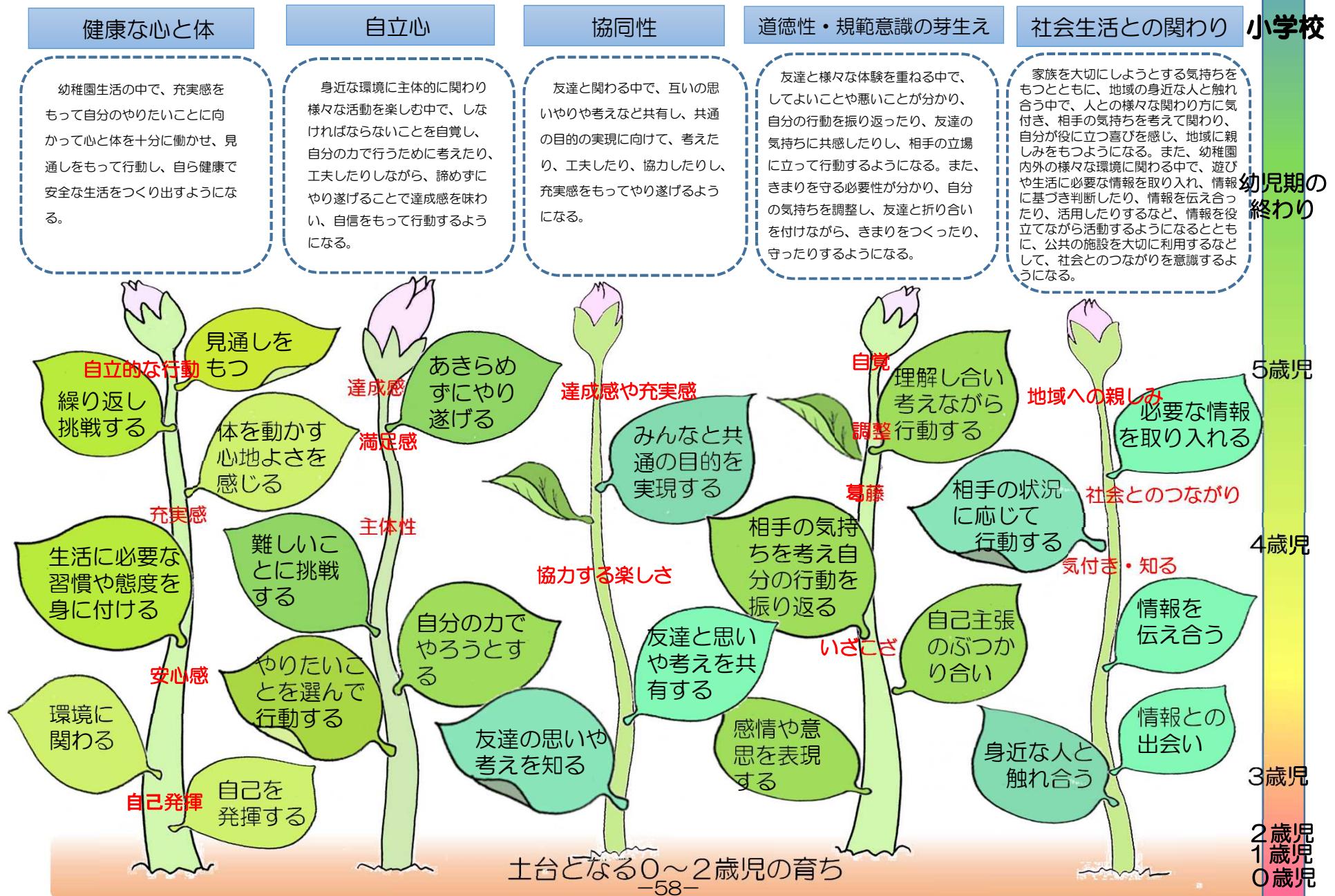
「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

就学前の教育が、小学校以降の生活や学習の基礎の形成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすることが重要です。

創造的な思考の基礎を培うため、子どもが出会う様々な事柄に対して、したいという意欲を大切にし、うまくいかなくても諦めず、更に考え方を工夫していくことができるよう援助します。主体的な態度の基礎を培うため、物事に積極的に取り組み、自分なりに生活をつくっていくことができるよう援助します。これらの活動を通して、子どもに「自尊感情」「規範意識」「学習意欲」が育っていくことが期待できます。

子どもが発達していく姿を、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」で捉え、日々の教育・保育を展開していくことが必要なことです。また、これらの姿は、5歳児に突然見られるようになるものではないため、5歳児だけではなく、それぞれの時期から、乳幼児が発達していく方向を意識して、それぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねていくことに留意する必要があります。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の発達過程



「自尊感情」「規範意識」「学習意欲」と同様に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」も、5歳児に突然見られるようになるものではなく、子どもが発達していく方向を意識してそれぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねることが必要です。

思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考え方を触れる中で、自分と異なる考え方があることに気付き、自ら判断したり、考え方を直したりするなど、新しい考え方を生み出す喜びを味わいながら、自分の考え方をよりよいものにするようになる。

自然との関わり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探求心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすること、気持ちをもって関わるようになる。

数量や図形、標識や文字など
への関心・感覚

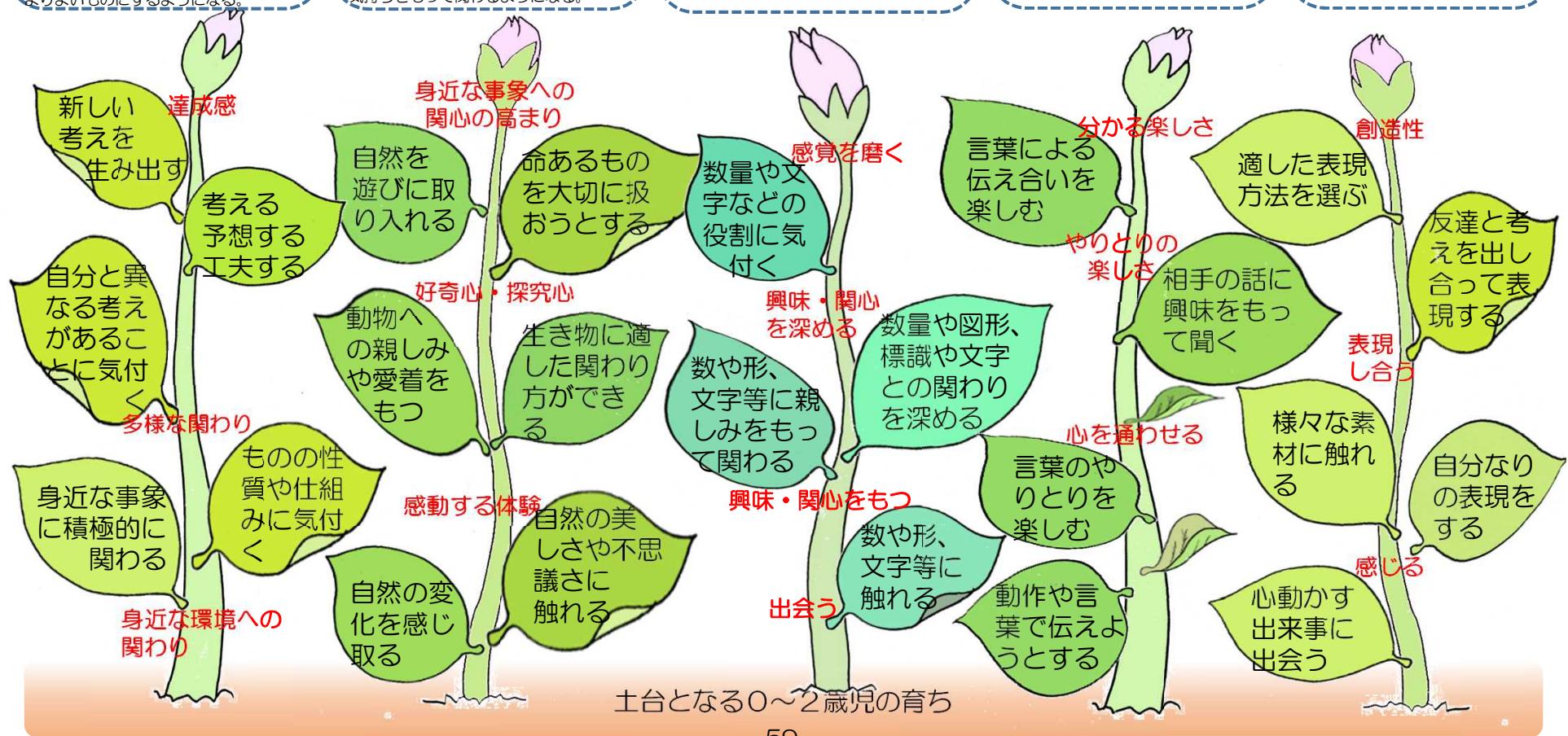
遊びや生活中で、数量や图形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

言葉による伝え合い

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。



奈良県版就学前教育プログラム
～はばたくなら～

平成31年3月発行
奈良県地域振興部教育振興課
奈良県福祉医療部こども・女性局子育て支援課
奈良県立教育研究所